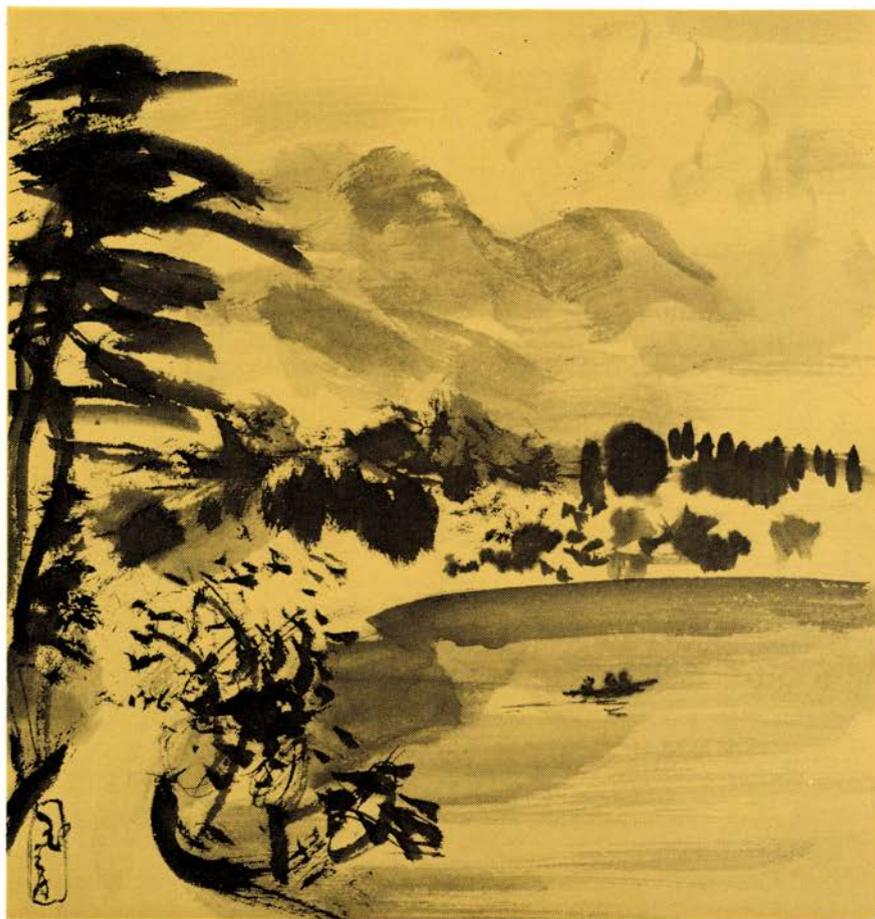


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十三年八月二十五日印刷
昭和五十三年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷 六〇四号



日川協加盟

No. 604

九月号

「旅人」以後の

麻生路郎作品(41)

三十九年五月号

不朽洞句帳

山と河 人ひとりなき舞台なる
雑木林を通り抜け俗事へ戻って来

斜陽の哀れへピアノが鳴ってる

老らくの恋が土筆をふみにじり

さざえの壺焼愚痴も淋びしき

春うらら帆を数えてる純情さ

しがない暮らしというのは他人ひとから見てのこと

俗のつれづれ石を愛する

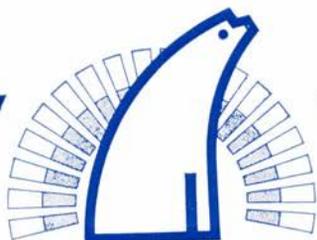
論説委員オレにも実行出来ないが

学生デモ巨万の鳥と争えり

小杉放庵逝く

星が流れた あれは放庵だったのか

(傍島 静馬)



HORAI



蓬莱商品の目印

アイスクャンデー

パイナップル・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ ・ ミックス ・ チョコ



〈出張販売〉高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

大 阪 ・ なんば



虚而不屈

この稿を草する頃には、さしもの参議院選もすんで、限らない騒々しさからやっと抜け出した思いである。考えてみると余程の知名人でもない限り、乙にすまして居ては落選間違いなし。多少ご迷惑でもとなり立てる次第であろう。そんな苛立つ私の眼に、堅山南風という芸術会員で90歳の日本画家が大法輪の巻頭に「虚にして屈せず」という言葉を提唱して居られるのがふれた。ご解説によると、「天地の間は鞞（ふいご）のようなものである。鞞は箱の中が空虚であるから把手を動かせば風が無尽蔵に出る。これを虚にして屈せずというのであって、多言なればしばしば窮す。中間を守るに如かず」と老子の中の章句であると述べて居られる。浅学な私には句論耳馴れぬ言葉であるが、異様に感じる前にこころひかるる文字であった。一部の政治家や自称教育者に知って居て貰いたいとも思うし、鞞の箱に似たものを大切にして精進する川柳人である私にも判るような気がする。

弥陀にすがり言うだけのことを言うてみる

お盆だよ偽善の顔顔絵そらごと

母の墓洗えば泣き虫に風匂う

先輩K氏を悼む

遺影拜む酔うたら踊る君なりし

懐しうて腹立たしうて原爆忌

庵々生島中

川柳塔九月号



座右の句

水溜りとびそこねて独りかな

(路郎)

私の句

ふるさとを持たぬ私のせまい地図 行 天 千 代

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

虚而不屈……………中島生々庵……………(1)

柳俳一如小感……………尼 緑之助……………(2)

誹風柳多留廿五篇研究……………(十六)……………(24)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔(同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

水煙抄……………菊沢小松園選……………(30)

艶歌川柳にもうたう……………東野 大八……………(22)

秀句鑑賞……………(同人吟)……………正本 水客……………(28)

……………(水煙抄)……………西田柳宏子……………(29)

愛染帖……………橋高薰風選……………(38)

52年度二賞中間発表……………(26)

柳俳一如小感

尼 緑之助

私の若い頃(一応五十年前)から「柳俳無差別論」はあった。そしていつの頃からか「柳俳一如」となり、「柳主俳従」まで現われている。

俳句研究にうとい私には、俳句の方にどんな反響があったか知らない。おそらく以前には黙殺、敢えて一人相撲に仕立てられていたのではないかと思っている。

しかし、第三者からも「柳俳接近」を指摘されるに至っては、黙殺ではすまなくなつて、俳句の中からも危惧感を述べる人が出て来たようである。

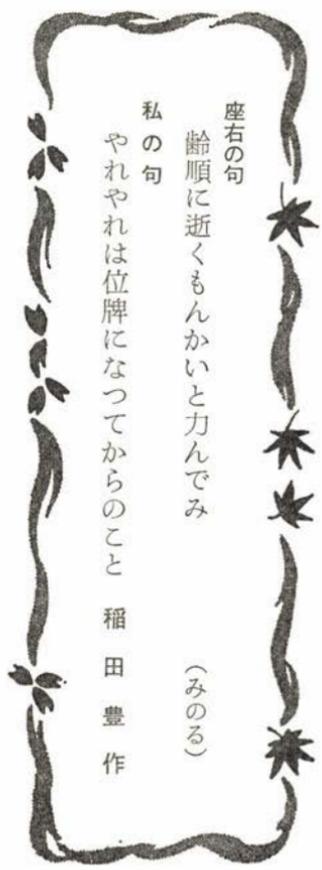
一般的概念による俳句が、古い殻にこもり、もっぱら風流事への傾斜を続け、孤高化するとなつると、「柳主俳従」もまんざら理想論でもなさそうに思われて来る。勿論五十年や六十年の短期実現は無理としても、また川柳もその裏付けをしなければダメ、という附則がつくのはやむを得ない。

川柳とは人間を主題とする、十七音の定型詩である。川上三太郎

人間の肺腑を衝く、十七音字中心の人間陶冶の詩である。麻生 路郎

川柳は人間である。梶元 紋太

路郎選・古川柳の味……………	八木摩太郎…(37)
一分間の柳論……………	玉置重人…(41)
川柳人と雅号……………	直原七面山…(41)
雅号ぶっちゃげばなし……………	堀江芳子…(49)
川柳塔社物故同人……………	不二田一三夫…(42)
あゝ 富士野鞍馬先生……………	本田恵二朗…(48)
初歩教室……………	川村好郎選…(50)
大萬川柳「箸」……………	柳界展望……………
本社八月句会……………	(庸佑・整理)…(54)
各地柳壇(佳句地10選)……………	村田瓢太選…(58)
「防災」……………	塩満敏選…(46)
一路集「敬老」……………	大山と金選…(46)
「残暑」……………	安平次弘道選…(47)
編集後記……………	(二三夫・葉子)…(65)



以上要約して『川柳は人間』そして「人間が生む短詩」と思っている私である。俳句は十七音を定型とする短詩である。山口 誓子

俳句にしても人間除外の短詩ということはありません。柳俳が俳諧から分派以来二百数十年、若干の変遷を重ねつつ、激動の現代に継承されたが、依然変化流動の問題を抱えている。同じ十七音子を基本とするこの双生児には、性格の差があるとしても、人間が生む詩である限り、同じ結果が生ずることは当然と言えよう。

『俳句のまねをするな』とよく聞くが、川柳を充分把握した上での作品であれば、俳句的な句であっても憚ることはない筈。俳句の方でも『川柳のまねをするな』があるそうだ。時代の流れを知らない人の言葉であろう。

殊更に、俳句は、もつと川柳に近寄れ、川柳も俳句へ少し傾斜せよ、と言うような、どこかの政党のような統一のための妥協策は弄すべきでないことは勿論である。

柳俳共に人間の詩であっても、現況では『のれん』が邪魔し、統一にはほど遠い、しかし長い間には離合集散の変化も起りかねない。或は別の名称による短詩系誕生というようなことがあるかも知れない。さて、川柳は『柳主俳徒』の夢実現の日が来るかどうか？



中島生々庵選

おぼはんと呼んだばかりに酌ぎに来ず
いつか云う言葉を秘めたまま左遷
ひょうきんな父に家族が盲従し
血圧を慰めあうて酌む屋台
泳ぐ児ら岸の日傘を確かめて

枚方市 宮川珠笑

絵日記よろしい父と子の火花
検痰瓶ずしりと不惑の掌に重し
人の計や本棚みつめしままに暮れ
それだけはゆずれぬ背筋となる老姿
手摺なき男の階段下を見ず

竹原市 三宅不朽

いのちがけなどと命を安く言う
振り向くな友よ別れが辛くなる
正直者には動まらぬ宣伝部
ジーンズの娘 鏡はいらぬだろ

神戸市 小濱牧人

M過剰の気焔をあげる大ジョッキ

竹原市 小島蘭幸

貸しポート去年の恋がゆれている
夫婦っておかしなものね仲直り
どことなく自信が湧いて夫の座
ジーパンが似合う妻なりよく動き
妻の首に鈴をつけると涼しかろう

大阪市 金井文秋

生き生きと挿し芽は梅雨の天気吸う
見て飽かぬ緑と花にある変化
生涯を賭ける仕事でない惰性
新しい波なら乗って見る若さ
アンダンテもアレグロもある人生譜

倉敷市 小野克枝

種も仕掛もなく夫婦の歩が揃い
給料に不足はあるが流す汗
会社では気軽に動く娘と云われ

幸せに聞き耳立てるひまが無い
透明なてのひらを持ち一本気

大阪市 小出智子

蛍籠あしたの縮図見せつける

一匹の蟬が真夏を告げに来る

生爪を剃きいましめと思ふなり

いつまでも故郷を想う洗濯機

狂わない時計を持って飢えている

松江市 小林孤呂二

地味に生き妻を連れだつ日の多き

解れないままで陳情は終りけり

応分に出すにも筋みちだけは聞き

俯角へ向う酒はちよびりにしておこう

止り木で手酌で今日を足りた顔

鳥取市 小林由多香

シェーカーのリズムに今日は酔わされる

いい返事したばかりに抜けられず

返信の切手を入れてもそれっきり

灯が見えてからの長い道

マイホームの夢追う汗の惜しみなく

松江市 中川晃男

ひとり言聞こえよがしの横目する

トウサンの音痴で眠る子守唄

孫の手と一緒に選挙カーへ振り

日々好日余生の腰が曲がりだし

もう一つあくびを足して梅雨を寝る

宝塚市 傍島静馬

心臓発作いつものやっちゃんと軽く見る

入院が迫りあれこれ用が出来

二十五年旬会全出席の夢破れ

夏休みのつもりでいるんだと主治医

かくなればじたばたしない長期戦

八尾市 大路美幸

瓜を剪る音だけがある梅雨の店

銀行を出て貧しさを問いつめる

鞭の音 背中で聞いて靴を履く

灰皿に生きた証しが捨ててある

いつまでも海に聞える 海ゆかば

八尾市 香川酔々

のら犬の瞳が澄んでいる奈落

梅雨明けの雷ひとつ無縁仏

揚羽舞う無韻の中の歓喜天

七夕の笹に揺れるは母の櫛

どん底で生きる男の数え唄

今治市 月原宵明

くちなしの花の白さよ思慕しきり

平凡でよし茶の間から笑い洩れ

ナイターが終り銭湯混んで来る

ひたすらに道一すじの袖カパー

食事の梯子が一脚空いている(母死去・83歳)

倉敷市 田垣方大

雨は寂し雨は愛情深めるか

あじさいの花に寂しさ見透かされ

下積み頃がよかつた夫婦仲

裸婦像で油断をさせた応接間

水着着て男の土俵へ割りこむ気

大阪市 山川阿茶

お見合いは明治のフィルターにひっかかり

花びらに乗って空中とんだ夢

本ものの歯の数自慢するも年

本物を造花のようと賞めるけど

つながれた小舟のんきに日向ぼこ

島根県 小砂白汀

母になる産ぶ着縫うてるマリヤさま

Uターンをつなぎ止めたは盆踊り

うろこ雲きよの晴へたどりつき

羽田発のように手を振る無人駅

美しい皺ですなアと賞められた

岡山県 嘉数千代香

ゴミ捨てへ生えたなすびも実を結び

鬼になる母の涙がふとこぼれ

パフ叩く涙は子等に見せまいぞ

これしきの石につまずく刻淋し

余生多忙日記に余白などはない

青森市 工藤甲吉

帳尻をいつでも死ねるよう合わせ

三猿となりひっそりと生き残り

六根を清浄にして雷雨去る

乗り遅れそこらで飲んでまた遅れ

仮名文字のように嫋嫋寄りかかり

守口市 村田瓢太

予定日を過ぎてても出てこぬ孫の抵抗

父ちゃん似 母ちゃん似と孫の品定め

赤ちゃんがおならをしたとふれまわり

画数がどうのこうのと名付け採め

また女でしたと嫁はすまながり

米子市 増田竹馬

油ぜみしきり風鈴沈黙す

遠花火耳に「旅人」読み耽ける

溪流を跳ねたポーズの鮎料理

観光地に住んで遠来の客絶えず

ともかくも素直に詫びる嫁でよし

松江市 恒松町紅

神様にも評判がある守り札

肩書に未練があつて病んどれず

仏壇の前で相続税でもめ

もう長くない筈なのが退院し

人様の事が気になる程に老け

大阪市 本間満津子

万歩計サツと追い抜く若い風

隠れ場所ほしい生活のガラス張り
淋しがりだからお喋りばかりする
まびかれる花にも生命のあるものを
貝になるときチラリ神の影よぎる

倉敷市 水粉 千翁

生き抜いて来た足音が乱れない
涼しさのしんみりひとり言となり
逢える日の笑顔が沈む水鏡

てのひらを忙中閑として見つめ
茶に如くはなし端然と安らぎぬ

倉吉市 奥谷 弘朗

これからはしたいこととして生きなはれ
ピーポーにお初に乗った軽い事故
病床の窓だけの空梅雨続く

悪いのが一人いて病室暗くなり
定年の老化防止か一万歩

泉津市 村上 春巳

心斎橋クイッククイックですり抜ける
肩書があって善意と見てくれず
鉛筆のにおい尋常高等小学校

酒だけは切らさぬ妻になつてくれ
アスファルト焼けつきまなき犬がゆく

呉市 榎田 英詩

白壁を剝けば明治が覗くかな
お茶一杯よばれて世辞を言うも齢

金の卵が孵らなかつた悲話ばかり
矢印の奥で故人が喪主が待ち
扶養家族がいて疲れたとも言えず

和歌山市 野村 太茂津

膝が冷えれば温めてあげよう膝で待ち
次の波また次の波海の大らかさ
掌を寄せて消えかかる灯をかばい合う
通せんぼする壁ならば蹴破ろう
そつとして離れて看るも絆かな

八尾市 高橋 夕花

四面楚歌 黙黙とネギ刻む
誕生日 すこし口紅濃ゆく塗る
クローラーの部屋で勿体なく一人
大胆な女になつて夏の河
妻ごろも洗つてみたし京の川

八尾市 高杉 鬼遊

政治家のための選挙に躍らされ
年金で食えず病気にもなれず
小アジもう我を裏切る値となりぬ
年金を笑うて物の値が上り
いつかお前も老人になるすて台詞

八尾市 宮西 弥生

不発弾作る女の手の中で
恋をする演技は花屋に教えられ
よろめきの作家になつてよろめかず

少年の眼に年上の女マリアです
迷わない女の風船すぐ割れる

米子市 小西雄々

反骨の過去は語らず聞きませず

不景気へ年中ホステス募集中

いい弔詞でしたと涙を拭きなおし

定年へ小庭もほしい設計図

禁酒禁煙してもこの世にもつ未練

大阪市 中川滋雀

頂上へ白一列の蟻になる 石鍾山登拜(二句)

山霊のこだまを霧に受け答え

喜びが顔に出せない意地を抱く

仕合わせがゴロ寝の顔に描いてある

私ならこうする妻の知恵を借り

柏原市 大峠可動

茄子病めり天気予報を真に受けて

傷ついて白衣の城へ迎りつき

輸血して傾きまいとす命

走らねば妻の日記に涙が溜まる

支え合う愛がふくれて翔びたくて

大阪市 本多柳志

石橋を叩いて運に見放され

七人の敵の一人に茶を招ばれ

妥協成立したが小異は捨てていず

平和とは売れる戦争回顧録

いい困にする一票をせがまれる

大阪市 西出一栄

芍薬の媚も四・五日して疲れ

とげ荒き胡瓜を買って妻の幸

茄子漬けに茶漬け半せん追加する

墓地の草ボンボンのびて梅雨明け

食べるよりうまいメロンの香を愛す

諫早市 原田明春

2DK仏も神もみな雑居

うたた寝が顔はテレビに向けたまま

プロポーズ時間を稼ぐ田舎道

女房のやる気白髪までも染め

無理矢理に別れあなたのためといい

鳥取市 河村日満

肩書きがとれば元の黙阿弥で

猪口をもつ手付きを亡父の名で呼ばれ

酒の量どかっと落ちをみせる老い

票にする握手顔など覚えてず

息せずに泣く憤激が孫にあり

島根県 榊原秀子

学力とは別な生活の知恵を持ち

祖父の忌へ幾年逢わぬ顔が寄り

果造りへつばめ必死のゆきかえり

父の日へささやかですがと荷が届く

電話では顔が見えぬと孫不満

守口市 羽原静歩

遺骨蒐集まだまだ戦後終らない

田高の海外旅行に縁がなし

一枚の畳にかかる権利金

かけこみ寺で見ている雲の峰

遍路笠二つの鈴がひびきあう

倉敷市 野田素身郎

父の日の父は疲れを癒すのみ

公約もいいが豪雨禍どうする気

子供達にはごく平凡な父にみえ

女難の相があると易者も不思議そう

招かれて来たのに犬に吠えられる

米子市 八木千代

不信感すこし手荒い夕の櫛

髪洗いたくなるたかぶりが耳にある

老後ふと今日はふとんを縫いためる

不機嫌も隠さぬ姑で信じられ

雑念よ唱名の声高くする

西宮市 藤村女

方言が同郷らしく酌ぎにくる

ふたありの歴史が終る目の窪み

移り気な人を恨んで燃える夜

ゆるし合う心の窓に灯のともし

故郷に母あり彼岸の花を選び

岸和田市 高橋操子

耐える方でよかった冗奮からさめる

親バカと知っていなながらバカとなる

生活の智恵ばあちゃんが居て楽し

日本史孫の意見とほど遠く

文明に生きてこよみの智恵も借り

倉敷市 稲田豊作

忍従の道を諭して母哀し

咲くまでを長く待たせて散り急ぎ

明日のある良人へ酌いで心足る

汗しとと余命つなぐにこの苦勞

老船の今日も漂い海昏れる

和歌山市 小川佐知子

大詰めへ逆転の夢捨てられず

親しさに甘えてしつぱ返しされ

見つめられまだ赤くなる性を恥じ

少しだけ事実を曲げて書く日記

逢いたさのつる昨日も今日も雨

岡山県 直原七面山

門一步出れば皆敵

森見ぬ愚かさも女

二号の嘘の可愛いくて

目を伏せて嘘の数々

阿呆が得だと言う利口

鳥取市 両川洋々

絶好球見送る俺に金が無し

自覚症状言わず一合だけへらす

失意の日つづきエプロンうす汚れ

もう捨てるもの無き身軽さを愛し

お隣りのボヤも知らずに他所で酔い

氷見市

関

美子

夏終るどこかに鍵を忘れたように

詫びの筆消え行くばかりの小さな字で

夫の瞳は愛という沈黙の言葉か

想い出しぐれ枯木のような胸に降る

たくまらず自然に老いたし翁舞

尼崎市

黒川

紫香

北海道を探る

北大讃歌ポプラ並木にこだましぬ(札幌)

ワッカナイ寒むざむと二人の歩が揃う(稚内)

道産馬が一匹原野に動かない(天北原野)

羅臼岳写して五湖は騒がない(知床五湖)

百人浜索漠として風荒るる(えりも岬)

富田林市

板尾

岳人

歩かねば寒くて夏の雪痛む

一枚の画集は白い雪である

雪握る右手に夏の死が匂う

雪解けの水でうぶ湯を沸す鬼

山男惚れちゃいけない夏の雪

大阪市

不二田

一三夫

文なしになってからが 男の勝負

土すこしあれば花なら咲こうもの

蚊や蠅も動けぬ病人知っている

死にぎわに二号の方へ手をのばす

鏡掛けおろし では行って来まーす

滋賀県

溝口

はやを

倅せはもつれた糸に秘めている

突いて来る対手の鐘が錆ている

肚すえて座っていれば蚊もささず

もの欲しい心の底を知る笑顔

西宮市

若林

草右

余命表信じて八十まだ稼ぎ

ダルマの目いれて逮捕の手もはいり

それだけで画になる女の厚化粧

カーテンコール隣りも叩くからたたき

大阪市

有信

新之助

原点に還りたくとも子がふたり

低くとも良さの分らぬ登山歴

やり直しが利かず迎えた銀婚式

暑いのが夏だ満喫してやろう

新宮市

大矢

十郎

貧しさを隠す障子を破る孫

一徹も密かに叩く計算器

甘く見ておれば見事な落し穴

最敬礼商人用として残り

鳥根県

堀江

正朗

朝告げる雀に生きている実感
先生に癒でなかつた手を合わせ
頼られて箸持つ手にも力入れ
切腹の傷の下まで風呂に入り

島根県 堀江 芳子

麻酔まだ醒めない夫と合わす息
女三人の見舞が去んだ静かさに
快復期あまえる急所よく掴み
退院の風さわやかに頬に触れ

堺市 高橋 千万子

貝拾う貝の命を思いつつ
たて糸の弱さを横糸整える
末っ娘よ急げ肩書ある中に
感激の母明治のつつましさを

富田林市 岩田 美代

人の気も知らずに雲は走るだけ
放って置こその内風が喋るだらう
覚悟せぬ鯉を見た日の淋しくて
この場合忍と云う字がキザに見え

竹原市 山内 静水

よく耐えたのうとライバル言うてくれ
ワンワンに着せるチャンチャンコなら縫える
ママさんの目に止り木の 父子
殴られてむらむらむらと好きになり

大阪市 天正 千梢

堅いベンチでドラマの吹きだまり
お礼もせずに功德をいただいて
いいわけのつもり左前よくしゃべり
弁解するから小そうちいそう見え

寝屋川市 宮尾 あいき

思い出をピンクに染める夫婦びな
伝道ピラキリストの御名踏まれてる
五百羅漢の中で亡夫の顔探す
ふるれば鳴る風鈴へ風が無い

京都府 松川 杜的

小豆島の旅に
オリーブ園通ればオリーブの唄になり
潮騒よ俺には俺の六十年
どの店もオリーブづくめの小豆島
何番かの霊場が見えるパスの窓

松原市 谷垣 史好

操短の工場は今日も草むしり
懐しき小使室の大薬缶
核弾頭のような乳房が迫るなり
ハンモック地球はなれて昼寝する

東広島市 高橋 鬼焼

ケロイドの血がしみついている仮面
夏がくる妻と水着を買いに行く
だまされておこうさよならするまでは
待つことになれて私の虹を追う

竹原市 森井菁居

繩のれん妻子忘れた訳でなし
男の花道をピエロのまままで下りんかな

振り返る一瞬 男負けている
妻には妻の計算があり酒を酌ぐ

富田林市 和田維久子

宴果ててピエロ自分の顔になる
この顔はひとりに見せる水鏡

たそがれて廃墟のバラの美しく
大原の里(淑光院)

治承寿永のドラマを庭の苔に見る
今治市 越智一水

米作る妻が食堂の米にふれ
見栄捨てて心豊かな妻となれ

太陽がぎらぎら稲がのびている
健康な汗を若さが見せつける

大阪市 河野君子

家計簿の死角に私のものを積む
定年以後の小径へ霧が立ちこめる

ことさらにとぼけ通した祭りの日
止まる日のないブランコぎしぎししみ出す

東大阪市 竹中肖二

朝顔の鉢も乾いて倦怠期
団体のバスに気ままが一人居る

雲湧いて闘志をもやす山男

手の内を読まれて投げる球がない

東大阪市 竹中綾女

渋谷三時の十年忌

畳替え障子張りして忌を迎え

亡父の書いた掛軸を床に忌を迎え
書いて来た人の当落気にかかり
満員御礼の幕も嬉しい勝名のり

松江市 岡崎祥月

日々好日神と対話をするゆとり

何も神彼も神神のなすままに
サイコロも一から一歩ずつ進む
おおらかな心で神の鈴を振る

米子市 林瑞枝

啄木の歌身に泌みて掌を洗う

贅沢とは云えぬヒスイの豆御飯
下町に汗の疑問も無く育ち
はじめての印象が脈打つ肩を抱く

和歌山市 垂井千寿子

英子様御亡夫を悼み一句

再会はスモッグもない雲の峰
ハンカチに生きる匂を浸みこませ
指切りの指から嘘が又生まれ
バラ色の青春 色眼鏡かけたまま

豊中市 安藤寿美子

子育ての野良猫必死の面がまえ

飾られた言葉寂しく聞いている
過去は過去未来は未来走馬灯
大西瓜全員そろう日まで置き

和歌山市 若宮武雄

俺だつて名を売る術は知っている
怪我癒えてまたわが道へ戻って
倅せにやつと逢えたら触れただけ
来た道を振り返りたい一休み

倉敷市 松井俊風

不幸などありそうもないつぶらな瞳

苔寺の雨は太古の色湛え

登山靴かなしい過去の疵があり

つまりいたときだけ故郷思い出し

藤井寺市 西 いわを

X線汝の肉は焼け爛れ

梵鐘のひびき睡蓮しほむ頃

草に寝て雲垂れ下る低さかな

日覆して緋鯉の鱗あせぬよう

島根県 梅 みどり

庭の花咲いて浄土の亡夫をよぶ

松風の音は家宝の湯気の味

ぬかるみを飛んで歩幅がくるい出し

念仏で堪えているから夜が深む

京都市 都倉求芽

言葉選る間にズカッと斬り込まれ

夏の陽を夾竹桃にみな盗られ
敵のない男味方のないを気づいてず
ハンドバッグ買い換え母の旅達者

兵庫県 遠山可住

道草の中で心にふれて来る
上衣脱げぬそんな肩書なら要らぬ
反論が口に出て来ぬ口を閉じ
弱点を拾う男が酌ぎに来る

平田市 久家代仕男

薪据えて唐竹割という構え

草刈機石にはじけた音で止み

よろこびのマイク思わず出た本音

豪快に笑いむなしきものよぎる

大和郡山市 森田カズエ

餌さとなる日のミジンコへ餌さを撒き

帯結ぶだけに母親呼びだされ

お手々つないでアベック道をゆずらない

遮断機があるから馳けてみたくなり

美禰市 安平次弘道

ワンマンへの抵抗みんな目になる

二百カイリ夫の釣りに期待する

妥協即裏切り血気もてあまし

パチンコ屋ほど花環並べて葬儀

岡山市 川端柳子

あじさいに傘傾けて梅雨の女

コロコロと笑う娘 葬列には出せぬ
海碧く浮雲にみる遠い人
すばらしい日とする献立練っている

宇部市 平田実男

飼い犬に噛まれた傷ですとも言えず
まだ見込みあるから手術に暇がいり
セールスマンこっそり他社のを使っている
雨洩りの我が家も私も更年期

岸和田市 福浦勝晴

嫁ぐ娘(こ)に体験者として母として

倒産は予算のうちの新会社

癌だよと笑って瘤でない証拠

もう秋だなあとトイレの小窓から

愛媛県 渡辺曉童

残照も一際日本燃え盛る

茄子を買うそれでもうちは農家です

座して食う無為を重ねて若い二人

開票までの きつい強がり

和歌山市 内芝としよ

井戸水のうまさ里にも今はなく

もう一度出してはたたむ亡母のへべ

いとし児の柔肌明日へ夢をくれ

脱ぎ捨てて我が家の茶漬で生きかえり

米子市 石垣花子

えんぎもの揃えて良き日の使者となり

城跡は語る先祖の知恵と富
半分のうそで外出の娘をかばい
長話したばっかりに雨に濡れ

和歌山市 津田与史

爪と髭だけは衰え見せず伸び
テレビなし電話なしそんな一日
泣いているうちは女でいる証拠
手品師が一枚かんでる不倖せ

生駒市 草深醉升

手の切れるようなお札は見せ金だ

反対で無いからしぶしぶした署名

怖いもの見る目で国宝覗き込み

欲しいほどお飲みと老妻逆らわず

藤井寺市 児島与呂志

妻の寝る時を知らない日がつづき

人間の弱身を闇の中で見る

もっともっと苦勞がほしい日ほしい

信頼のないコンピューターで胃を切られ

鳥取市 大塚豊生

当落はあした首まで湯に侵かり

落選のポスター雨に日に褪せる

色褪せた幕に家紋が消えのこり

逆転へ遺影はひとり語らない

大阪市 神夏磯道子

梅漬ける今夜も外は雨の音

人の世話好きでとうとう疲れ出し
定期便のように姑が顔を出し
半分は知慧補うて父母の愛

和歌山市 沢山福水

ルーキーの魔球に軽くあしらわれ
性凝りもなくかつがれて腹を立て
中元の箱が重たい田舎みそ
拗ねるだけすねてするめは焼き上り

神戸市 仲 どんたく

七夕の夜ぐらいは星と語るべし
税理士は社長の涙も知っている
出稼ぎの柩は氏名不詳殿
至近彈落ちし心地の友の弔よ

大阪市 神谷凡九郎

僕の票静かに静かに死にました
御苦労さんホンニ選挙も済みました
多数決の愚劣さ開票と云う数字
誰かが泣いてそして笑ろてる人が居る

守口市 野呂右近

負け意識し乍ら靴履くのも男
無理するなと言うて皆んなが倚りかかり
用意した言葉出す間も無く負ける
くたくたに疲れた中に潜む幸

岡山市 時末一灯

訃報見てさぼった薬またひろげ

石投げて海の広さを知っただけ
ロッカーへ僕を預けて旅の夜
ふてくされ顔がだんだん俺に似る

倉敷市 小幡里風

ゆきずりの小雨が憎くい旅日記
冷えた眼で自身見詰めている嫌悪
青年の明日へ泳ぐ夜の海
証文の余白へきつい但し書

西宮市 島居百酒

竜神温泉旅行(二句)
山の湯の河鹿日本を呼びもどし
清姫にならぬ女と日高川
捨てきって捨て得ぬ命を釜ヶ崎
耕運機使えぬ山田の米の味

桜井市 岩本雀踊子

夫妻の影絵を妻が抱いている
つれづれの妻の祈りがなくなる
内縁の妻をかばってやる不孝
無駄足になるかも知れぬ汗を拭く

高槻市 若柳潮花

絵ハガキで旅の匂いの匂が届き
あじさいの色がとけそな雨の音
鮎釣りに出かける車みがきたて
今日あたり誰か来そうで爪を切り

豊中市 戸田古方

花少し途切れ鬼百合咲きはじめ
起承転結ドッキリさせる手もおぼえ
さわってもさわってもこれが造花やいえまっか
眞実は口を拭って伴わりぬ

伊丹市 檜谷漫柳

偽りの笑顔を見抜く子等となり
気負い出る夫へさりげなく靴揃え
三十年耐えた笑顔を作る妻
十月の花にも花の春があり

大阪市 室谷徹舟

簡単に済ますつもりが話し好き
旅に出て気になるサツキへ雨が降り
大役に微力な自分悟らされ
ポーナスのニュース無職をひがませる

倉敷市 藤井春日

伊達巻の女けだるう歯を磨き
鳶が舞う吾が人生もかく生きん
踏み出した一步千里を飾らんか
人妻の虚像に過ぎぬ女です

柳井市 弘津柳慶

冷凍物の味に馴され文化国
自販機へいささか不安なボタン押し
妻の寝言を朝になって忘れて居
今日も又死亡欄へ目を通し

島根県 錦織文子

炎えている彩も着て付つあじさいの
衿垢の形見を抱きぬ三回忌
なつかしい夢だった 布団干してやり
愚痴一つ つぶす女に勇気がいる

出雲市 原独仙

拙筆も紙は素直に墨を吸う
贈り物謝礼の線をはみ出てる
忘れ得ぬ過去現実の隅に抱き
無限なる句材拾らえぬ苦悶の日

仙台市 川村映輝

戸籍より末っ子も消え古い二人
浅学菲才本当のこと言うただけ
タレントの離婚待ってる週刊誌
食べ物も着るものまでも妻好み

松江市 柳楽鶴丸

離婚 ヒューズが切れました
宝石を喜ぶ女にした男
若き日の声紋テープから流れ
天国で恋を結ぶ 敗北者

玉野市 小谷仙山

神さびて只夏草の繁るのみ
公害も文化も知らず溪の百合
空炎えて静かに今日も終りけり

誘惑に勝ってさびしい気で帰えり
島根県 太田亀甲

お人よし善意にとつて損をする
笹巻が上手であつた母思ふ

大阪市 那須鎮彦

腕時計持たぬ男が先に来る
ふる袖が無いので恋はすれ違い
明日は勝つ秘策が出来た真閉じ

大阪市 江城修史

負け犬は悲しからずや吃る癖
隙のない男の言葉は疲れます
人生譚恩師の言葉が胸に生き

和歌山市 吉野富子

貧乏な妻更年期なぞ知らず
米寿過ぎまだまだ語気の若い母
札束に弱い姿勢を見抜かれる

大阪市 藤田頂留子

愛犬綱吉公の末裔かも
だんじりも見たいし野球も気にかかる
あばれない御興に年寄り物足りず

鳥取県 林露杖

やどかりの散歩を騙る磯の波
石投げて波紋の外で北叟笑み
暑に耐えて職なき無為の日々に耐え

唐津市 新岡回天子

新築へ引越し団地を羨ませ
どこの人思い出せない今日の人

同窓会俺にも白髪が有るのかな

京都市 山本規不風

追い詰めた犬 大声で猫を逃げ
恋猫の仏丁面が戻る朝
商魂の影に良心消えかかり

大阪市 西森花村

大学へ行って仕上げる怠け癖
迷い道元来た道も消えている
引越して団地村まで酒買いに

大阪市 横地雅風

何もかも呼んでいるよな郷里帰り
はっとする窪みへ足の齡を知り
手まで添え女のしぐさでするあくび

大阪市 黒田真砂

一徹と思えど長所かも知れず
云いわけになる一言をかみしめる
よく笑う女で過去を明さない

大阪市 川口弘生

音たててのめば旨そうなスープ
生命までとられぬと決め箸を割る
新調のメッシュで俄雨に会う

堺市 伏見茂美

疲れ見せて紫陽花遅々と色変える
夫婦して甘えてくれる老の幸
同居など無理な娘ですと又逃がし

岡山県 竹内翁童

うそだとは知りつつやさしさについてゆき
見送りの手持ぶさたや話題切れ
いんぎんにポリス違反を認めさせ

大田市 藤田 軒太楼

本人も知らぬ好意にある真味
身に覚えあるから黙秘の術で逃がれ
半分は嫌味ととれる愚痴を云い

兵庫県 大江 秋月

女下駄一寸借りてく夕涼み
ローカルの鉄橋過疎の音で過ぎ
札束を勿体なくも銀行員

大阪市 西川 誓二

老いてまだ反骨の血をたぎらせる
有名校へ子の夢教育ママの夢
観光バスの行かない寺は踏み荒れず

竹原市 鈴木 かつ子

デマだった噂にはっとする浮気
ひとり旅山の向うに夢を追う
張りつめた気持ちがゆるむ朝の雨

岸和田市 植山 武助

一人で飲むコーヒー悩める者に見え
何時の間にもうるさい男になりかかり
老いて子に従い兼ねる廻り椅子

兵庫県 河原 みのる

三田、永沢寺にて(二句)

脚下這う雲に標高確と知る
たたずまい質素におわすみ寺よし
濡れツバメいっそ休めよ腹がへる

和泉市 西岡 洛醉

夏バテのリズム狂った俣で秋
右肩を落せば父の背となり
若造り歩調やっぱりおくれがち

大阪市 河井 庸佑

塾へすら入れて貰えぬのに弱り
夏休みよくぞ遊んだ日記帳
親のする通りにした子叱られる

島根県 藤井 明朗

待望のプールへ寄付も物価高
制服の使いわけする悪の道
おんなひとり慣れても男になりきれず

東大阪市 落合 思月

生活の匂をさせて女客
身だしなみと云う逃げ道で厚化粧
お早うと花がほほ笑む花畑

大阪市 神田 秀峰

人に物聞いて知らなきゃふくれ面
暗闇にサングラス掛け馬鹿に見え
雑談へ人の噂で座が弾み

東京都 山根 白星

長靴を干し母子寮の誰も居ず
追憶につながる森の湖光る

口開けて飲ますおも湯に伝うもの

竹原市 時 広 一 路

挨拶の長さビール瓶も汗

我が思う色に染まらぬけど近い

せかせかと影まで忙がしそうに行く

宝塚市 小 畠 無 聖

ゼロでない過去しっかりと負いつづけ

落語家は頬うつ指で蚊をつまみ

世の中のバックミラーを見るこわさ

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

しあわせは女房がお茶を酌いてくれ

大臣も俺も一票愉快なり

湯豆腐で一杯なども侮れず

鳥根県 大 森 孝 華

ピーポーに慣れて世相はふりむかず

風みどり旅情へ拾う詩ひとつ

芸の枯れトップスターにある個性

姫路市 大 原 葉 香

マンションは人を四角う飼いならし

ああ軍艦マーチパチンコ屋に落ちぶれる

雑草でよし一輪を咲きつくし

東大阪市 齋 藤 三 十 四

台風へ土下座ばかりはしとれんぞ

不景気と云うのに寿命また延びる
今年も踊る阿呆に来いと云う

姫路市 梅 谿 庵 不 醉

二本目も決意がつかず吸う煙草

染めなはん貫録がある白髪ほめ

楽隠居利子が上がると下がろうと

大阪市 津 守 柳 信

重箱のすみをせせらず居る度胸

衣食住足りて選挙は頬かぶり

公私共限界にいる腹の虫

今治市 長 野 文 庫

似たような人が方々に居るドラマ

何もかも半端のまま年をとり

くらしの遺物三角形のにぎり飯

貝塚市 行 天 千 代

おしどり夫妻一人残して先きに逝き

年金で暮らす私に借りに来る

田植え済めばもう嫌らわれる梅雨の雨

鳥取県 清 水 一 保

日本の心が浮んでる雲の峯

故郷の歌を心で口ずさみ

本名より仇名に惚れてる良い男

榎原市 岩 井 本 蔭 棒

じり貧で終る余生と覚悟する

児の瘤へ机のかどを叱つとく

お隣りの朝顔へ種類んどく

東大阪市

桑原喜風

なけなしをはたいて光る奉加帳

豊作の為なり暑さいと易し

伊藤茶仏

北海道

正本水客

一議席死線を越えた車イス

二十位の票が支えた車イス

車イス迎え議事堂ベそをかき

日銀もついに兜をぬぐ不況

親と子の対話がはずむ螢かご

尼 緑之助

川跡は人家尼子の古戦場

太鼓壇古き戦さの声遣こす

あまがえる皆東向き朝の雨

わめきつつ土足で走る参院戦

性別を背なからしばしクイズする

浜田 久米雄

萩の街明治維新が匂わない

関門橋一万四千本で釣り

帯解いて女 女の姿なり

まなじりを立てて女のファイト行く

もうすこしじらして置けという鏡

本田 恵二朗

三面へ脳底骨折多い過ぎる

黒を白と言ひ張って鬼頭節

老妻から黒星ばかりもろている

バス走っても走っても何もない素晴らしさ

丘かさなり重なり合うて海に落ち

放牧の牛てんと野の祈り

トド松林の白骨が砂州を眠らせる

這松の髪おどろなる月が出る

小西無鬼

寝煙草を又叱られた蒲団です

御先祖の供養と納得させられる

腹立ちを呆けた振りで押えとく

気をつけや大事にしいやと喜寿近く

寝ころべは躰の妻をいとおしむ

菊沢 小松園

そつのない手段でコンペアーにのせる

紫陽花の自分の色を見失い

岸を打つ波は努力というかたち

爪に火を灯した先祖を持ちながら

生活に触れる芸なりそつが無し

川村 好郎

顔の皺の中に小さな誇り秘め

飛び過ぎて転んで蛙考える

晩酌に叱られそうな今日だった
金の要る話 風呂でも入ろうか

うぬぼれをおだてる拍手掌が痛い
寝たきりの記事へ私を置いてみる
割れもせぬ約手送ってきた暑さ

一匹は手の甲に廻っていた螢
のむ話になって見舞もほっとする
見舞客元気をだせと無理を云う
父の日や父病床に点滴す
ねころんで作句する手も銷夏法

夢醒めて紙の音する千羽鶴
望郷の断簡なれば更に切
恋文の緘は水平線に見え
病み上りに心もとなき鏝の目
曼茶羅に原子のごとく仏たち

西尾 葉

橘 高 薫 風

和田恭子句集

「風見鶏」

刊行記念句会

日時 9月23日(祭) 午後1時

会場 青木文化センター2階和室
但し阪神電車青木駅下車東南3分

兼題 「風見鶏」 和田 恭子選
「水」 室田 千尋選
「翔ぶ」 田中 好啓選
「火」 去来川巨城選
「骨」 橘高 薫風選
「悔い」 三条東洋樹選

席題 2題当日発表

投句締切 午後1時45分

会費 500円

懇親宴 1000円

(豪華賞品多数用意、終了予定午後5時)

—52年度二賞発表句会と

同人総会—

—川柳塔社主催

日時 昭和52年10月9日(日) 午後一時開場

会場 大阪府中小企業文化会館(五階五三号室) (天王寺区上沙町5丁目25番地・地下鉄谷町9丁目下車・南三百米(電話771・4096))

▼同人総会は午後2時〜3時30分。(同人総会の案内状は出しませんが役員改選等、出席者によって採決させていただきます)

▼式次第—司会・西田柳宏子—開会の辞・川村好郎—挨拶・中島生々庵—議事①会計報告・若本多久志②役員改選③事業経過報告・西尾葉④質疑応答—閉会の辞・菊沢小松園。

懇親宴 同会場で4時〜5時(会費二千元) 同人以外の方のご出席歓迎。

▼二賞発表句会は5時50分から。

柳話

路郎賞・川柳塔賞表彰

中島生々庵

兼題

「しごき」

高杉鬼遊選

「朗報」

野村太茂津選

「番号」

小浜牧人選

「草分け」

橘高薫風選

席題

二題と選者は当日発表(各題三句以内)

会費 五百円。

演歌川柳にもうたう

東野大八

岐阜県の盛り場、柳ヶ瀬で冷たい生ビール
のジョッキを乾し合うと、口辺の泡の始末も
忘れて、この相手、気負い十分に、韓国で若
い妓生と寝た話を一気にぶちまけ始めた。

二十歳を出たばかりの、マリのようにはず
んだ韓国美人の肉体が、いかに絶品であつた
かを、彼は八方美辞麗句を掲げて語り抜こう
とする。心おきなく禿げ上って、陽焼けして
シワまみれの頭に、無精髭はもはやこれ白毛
の彼だが、その異郷におけるセックス談義は
まるで青年のごとく精気ハツラツとして、バ
イタリテイそのものだ。

老いたりとはいえ、この一個の男性をかく
も歓喜儼躍の宇頂天ぶりに誘い込んだ韓国美
人の、房事における全力投球ぶりを、二杯目
の大ジョッキの彼方の空間に思い描きながら
私はただわけもなくニヤニヤし、懸命な真剣

さで語り抜く相手の顔を垣間見ている、人の悪
い半畳も入れて、うちうなずいてばかりい
た。その、そねめ、そねめの一大おのろけの
ひとりだんぎの中に、若き日の私もいつかた
くましき肉体でみえ隠れしてくる。

さて、一場の韓国セックスだんぎもやがて
花やかに一段落がついた。

「二泊三日で、二十五万円使った。だが、
おれはもう一度、近いうちに出かける。なぜ
ならソウルには、おれの青春があつた」

結構だ、結構だ、とわがことのように私は
きつぱりと答えながら、歓極れば哀感多し、
セックスと別に、ソウルの夜に诗情はなかつ
たか、と私はつけ足した。韓国美人に骨身を
抜かれても、彼は郷土岐阜では、一応のA級
詩人で通っている御仁だからだ。

「うん、あつた。それはソウル滞在中、片

時も離れなかつた韓国のメロディ、音楽だな
あ。向うにはテレビがない。すべてがラジオ
万能夜十時以後は外出禁止だらう？だから、
いやでも韓国調のメロディに首まで浸り切っ
た。彼女とのお祭りがすんで、ぐったりとし
たおれの五体を押し包んでくるそのメロディ
一口でいえば、それはすべてが日本の演歌
調、そのものなんだなあ。キミイ、日本の演
歌でえものは、ありやあ、韓国が本場だよ」
私ははじめて人並な顔付でいる相手を見返
えし、ここからの尊厳をこめていったこと
である。

「左様、日本の歌謡曲の演歌は、朝鮮民族
のここから出たメロディなんだ」

演歌・艶歌・怨歌―数多くのあて字が用い

られているが、私は演歌を妥当なところと解釈しているので、以下「演歌」で扱うことにするが、名古屋市で朝鮮人の学校の先生をやっている友人Aと、数年前のある機会に、日本の演歌について語り合った。その時、彼は「水前寺清子や北島三郎の演歌は、朝鮮の歌謡からの亜流で、厳密にいえば、在日朝鮮人二世の疎外感の心情から出たものだ」と思ふ。私自身、この説にこだわりが出たとしても、演歌の流行源はアジア人の心情のメロディそのものとの解釈が自ずと顔を出す。朝鮮でも香港でも、マニラでもタイでも、文句なく受け入れられている現象がそれだ」

そう語った彼は、私のアリラン峠の民謡が演歌のキイポイントとする説に同意した。

現行の歌謡曲で、演歌の占める比重はきわめて高い。大衆の愛唱にたえる演歌には、涙と雨と波止場の合成が一番だといわれているが、そうだからといってこれさえ揃えばヒットするとは限らない。歌詞とメロディとそれらが織りなすムードのストーリー性がカンドころというわけだ。

戦後の混乱が次第に収拾され、朝鮮事変を契機に、日本の経済復興が軌道に乗る頃から演歌は過熱したブームを形成しはじめる。笠置シズ子、美空ひばり、田端義夫、水前寺清子、北島三郎、青江美奈、森進一、都はるみ

と思いつくままに挙げる演歌歌手は枚挙に暇がないほどだ。田端義夫の「かえり船」北島三郎の「函館の女」都はるみの「涙の連絡船」などを憶い描けば、森繁久弥や藤圭子、ピンカトリオから、現代では八代亜紀まで思いつくままの私の演歌歌謡曲は、とりとめもないほど豊穡にして絢爛としている。酔うて音痴の私がハミングするナツメロの数のなんと多いことか。これを書いている私の耳にも、近所の工場からきこえるのは「北の宿から」や「岩壁の母」である。女として母としての恨み節が、至極ナニワ節的だが、どこかホロリとする哀愁をただよわせている、その歌詞・メロディ。

演歌には男への恨みつらみは、愛や恋の未練の想いや涙と抱擁といったものが多い。「うわべばかりとつい知らず、惚れてすがた薄情け、酒が云わせた言葉だと、なんでもいままさら逃げるのよ」(女心の唄)

「花よきれいとおだてられ、咲いてみせればすぐ散らされる 馬鹿な馬鹿なばかな女の恨み節」(怨み節)

女の業(さが)の、どうするすべも愛怨のきずなは、いかなれば「性」そのものの時代相ともいえる。演歌を艶歌とも称するユエンでもある。

さて、いろいろと現代歌謡曲の演歌のコマ

ギレを痔もなく思いつくままに並べてみたが川柳にもこうした「演歌調」が、ひとこから今もなお、柳誌の中であとを絶たない。それはやはり女流の作家の側に多い。

「死んで花実が咲くじゃなし、怨み一筋生きていく 女、女、おんないのちの怨み節」

(怨み節)

調をそのまま句にしたものがなんと多いことか。傷つけられた女が、その性(さが)にもだえぬき、うらみ抜いて、そこからのあきらめから脱け出ようとする怨念故の生きるエネルギの独り語り、これがひところの女流の新しいタイプとしてもはやされた。いまもなお、この作句上の手管というかテクニクは変らない。

一方、男の側も「あなたの為を守り通した女の操、今更他人に捧げられないわ、あなたの決してお邪魔はしないから、おそばにおいてほしいのよ」の「女の操」にしばしば「はるばるきたぜ函館」に共感する。私の男心をそそのかす八代亜紀は「もう一度あいたい」にパンチをきかせ、川柳ではいかがかと問う。川柳にも演歌調が幅をきかす、これも歌は世につれの反応か。とにかくソウルのセックスだんぎは、ついに日本の歌謡曲の演歌認識におよんだのも、真夏の夜の生ビールの男ごころのせいかもしれない。



西原亮

誹風柳多留廿五篇研究

— (十六丁) —

入江 勇・紀内 恒久・鈴木 黄
清 博 美・青木 迷朗・室山 三柳
八木 敬一・西原 亮・岡田 甫

211 母親ハ子ゆへの月夜にもまよひ

入江—親の愛情の深さが時として理性を失わせる意の俚諺に「子ゆえの闇」がある。「子ゆへの月」はこれを借りたものだが、「月」は吉原紋日の月。

八月十五夜と九月十三日は、吉原ホステスの辣腕の見せどころ。高いパーティール券を買う息子に、母は箆絡されるのである。

片月見だあなと母といぢり合 七・32

室山—「子ゆへの闇(月)」は、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰集』藤原兼輔)から出たもので、この歌及びその部分は、『源氏物語』の各巻にも引かれ、謡曲でも「隅田川」・「藤戸」・「木賊」・「元服曾我」などに引用されている。

岡田—室山説、ご明解。謡曲からの知識の援

用。

215 京都でも不沙汰の門ハ横にふり

入江—①門を「モン」と読んだので、不浄門かと考えたが、家の門(出入口)→門口とすれば、日頃から義理を欠いている家の門(不沙汰の門)は通りづらくて避けて通る、でもいいのか。江戸ではいまでもなく、もつての外にけちん坊」といわれた京都でも。

女房と相談をして義理をかき
たたも行かれぬがぶさたのなりはじめ

初・40
七・8

「横にふり」がはつきりせぬ。

②この門を「門口」「陰門」「前門」「表門」と俗称するように女陰と解釈する。「京風いろは短歌稿」に「のきをならぶる町中で

おいへさんでもいとさんでも、くるりとまわって立小便」とおもしろい文句がある。川柳にも、

京女立てたれるか少しきづ 六・24

とあるように、京女の立ち小便を詠んだもの。昔の女は専らこのスタイルで、フィニッシュでは腰を左右にふるのである。「不沙汰の門」とは、ドラ息子の訪問のなき場合で、排泄オンリーの門の意である。

清—入江氏③説に賛。ただし「不沙汰の門」確証が欲しい。

紀内—駄劣解をひとつ。

ちかつきを考へて居る雨やとり 三・26
とある如く、普段不義理をしている家でも背に腹はかえられず、不沙汰の言訳をしながら傘を借りに行くということ。

さて本句は、したがって、不沙汰の言訳をしながら傘を借りに行ったが首を横にふられ

て断られるというのではなからうか。

しかし、「京都でも」が不安。強いていえば、「京都人の外面の良き」、京都人は心でどう思つていようとニコニコと応待するであろう。このように外面的には愛想がよいはずの京都人ですら、不義理の人間に対しては、さすがに心良くできないということか。なお不安。

よく生きて居たかす傘ハ無イといふ

安六・仁一

青木一。同。礎稿①説及び紀内氏説が妥当と思われるが、不安が残る。

西原一紀内説に賛。なにしる京は、

廂丁をはすに遣ハぬ京の夏

二八・4

という程のところだが、不沙汰の時は別であると。ただし雨やどりではなくて、借金の不義理である。

岡田一ハッキリせぬ句。一解を述べれば江戸の其角の句と同様、京都では神泉苑での小野小町の有名な雨乞いの歌がある。それをテーマとした句ならば、歌の効果ではげしい横なぐりの降雨、平素ごぶさた不義理の家に傘を借りて寄つても、頭を横に振られた……とでもいうのか。「京都でも」の語からすれば江戸との対比を暗示したのかと思う。「横にふり」は「横に降り」と「横に振り」の両意がふくませてある。但し、「ぶさたの門」の歌の故事がありそうな気がしてならぬ。そこが一脈の不安。

野がけ道すくもへ銀の首を入れ

入江一「すくも」は榎殼の古語。道端でいぶつてゐる榎殼へ銀キセルの雁首を入れて火を借りる。

野がけ道家をさがして火をかりる

寛三・27

火をかりによれば田舎ハ一本出し

七・20

(もえさしの薪)

岡田一賛。

277 席正しからずとまでの安見合

入江一「とま」土間。棧敷をかりて隣同志の見合でなく、割土間の見合であるから互いに斜めに見る。論語の「男女七歳にして席を同じうせず」にかける。

席正しからず土間での安見合

九四・29

岡田一賛。

278 其時分ぐにや雲といふ大夫出来

入江一仙台侯、高尾に振られたので、こんどは三浦屋の薄雲太夫に足をはこんだ。ところが初会から従つたので有頂天となった。世人これを「ぐにや雲」と悪口した。

薄雲が背中その頃指だらけ

二一・24

この句は大村沙華氏「川柳伊達騒動」の八傾城薄雲、片倉小十郎Vの項に採られてい

る。また「川柳江戸歌舞伎」に「その時分ぐにや富と云ふ太夫出来」として、勝手に「ぐにや富」と改めて、俳優中山富三郎の異名が「ぐにや富」と称した女性であったので、雲を富として誤りを犯した形である。

さて薄雲は実在したようである。「万治元年新好原細見図」に京町三浦屋四郎左衛門内に、太夫高雄とともに同薄雲と見える。

八木一「川柳江戸歌舞伎」には、他にも、

女房が団十郎で亭主ぐにや 四五・5

ぐにや富の頃に菊島はやり 一〇七・91

虱喰ひ下女ぐにや富の身でこすり

五七・5

などの例句を挙げているので、「ぐにや富」というアタ名は当時或る程度流行したのであろう。そうすれば、「ぐにや富」をふまえての作句であろう。

青木一賛。

二度目にハうすくもといふぐにや女郎

天五・智5

うすくもの生国京都だもしれず

猫のよふな傾城は薄雲なり

天七・九・五

岡田一「ぐにや富」は中山富十郎のこと。女形が得意で女性さながら姿態がよくグニャつくので、こう呼ばれた。高尾の張りの強さに対し、薄雲がすぐ仙台侯になびいたので、句では「ぐにや雲」といったまで。但し、仙台侯が薄雲を落籍したというのはフィクションと思う。

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 五十二年 五月号
至 五十二年 八月号

路郎賞候補作品

(到着順)

正 本 水 客

黙ってる母が一番たのしそう
君を得ていのちの重さ知るのなり
和田維久子

小島 蘭幸

生き方の違いを敵のように言う
柔かな雲にキリンの首とどく
イヤホンで聞く長唄へ手が動き
嫁はんになればなんとかなるだろう
森井 善居
香川 酔々
若柳 潮花
神谷凡九郎

分け合うて近所も同じ花が咲き
大空へ向って不遜なる欠伸
年の功にされて寂しい酔い加減
化粧する鏡の奥に急な坂
敵のない八方美人にある表裏
きつ先をこわごわ庇う鞘の奥
金井 文秋
時広 一路
小林孤呂二
河野 君子
大森 孝華
長野 文庫

川 村 好 郎

鎖からはずせば一個の小さい輪
ぬくい日も冷たい日もあり二人の手
川端 柳子

暗闇で何を探している女
暗闇で何を探している女
野呂 右近

嫁はんになればなんとかなるだろう
小野 克枝

無から有 明日のロマンの頁くる
神谷凡九郎

庶民絶叫符は風にさえぎられ
フト見れば私の表札いがんでた
花嫁の父を眼で追うのよせよ
はか無きは自分の杖にけつまずき
和田維久子
嘉数千代香
岩本雀踊子
小島 蘭幸

小小さく小さく夫婦は円を描き直す
西出 一栄

一期一会みな邯鄲の夢なりし
もつと倅せにしてあげたいな寝題
和田維久子

若 本 多 久 志

叱らない父へ黙って酒を酌ぐ
堀江 芳子
月原 宵明

若 本 多 久 志

生き方の違いを敵のように言う
逆ろうて愛の証しを問うている
春めぐる母なる匂い蓬摘む
髭剃ってサテ定年の行く先は
思い出のぬくみ小出しに抱いて寝る
半別居下からじいちゃんごはんです
仲どんたく

森井 善居
小野 克枝
水粉 千翁
中川 晃男
八木 千代

生き方の違いを敵のように言う
居直った私を私ももて余し
春うらら地球大きくなったよう
逆行の廻路は亡父のシルエット
父の口癖鸚鵡にしてやられ
崩れても咲いてもバラは気候なり
時末 一灯
森井 善居
三宅 不朽
西出 一栄
三井 酔夢
藤井 明朗

先走りされて話が崩れだし
大自然の中でキャンプに閉じこもり
和田維久子
小砂 白汀

西 尾 菜

暗い路選んで帰るほたる箆
日記書く少女に山の父がある
下宿代ためて世に問うものを書き

中川 晃男
本間満津子
板尾 岳人

刃物屋は凶器を売ったおぼえなし

山根 白星

屋ドラマ姑のあくびで終りなり

安平次弘道
伏見 茂美

菊 沢 小松園

子に渡す地図に矢印は書かぬ
心齋橋なんの心配もない顔ばかり

小浜 牧人

不二田一三夫

武器すてた日から女の一人旅

黒田 真砂

雨濡りの記憶の中に住む二人
花の名を知って不幸な過去を持ち

小野 克枝

シートは無言で物干竿にゆれ

月原 宵明

これ以上掌を扱げない八つ手の葉

原田 明春

湯上りを手錠が待っているドラマ

西 いわむ

気に入った方から順に断られ
貝殻の不满拾ってもくれず

山本規風
小谷 仙山
時広 一路

橘 高 薫 風

彦根城迷って梅の園に逢う
札束を持つと小さくなる男
臍くって小さい汚職した気持
花吹雪こんな往生出来るなら
減税の分は歯医者が削り取り
六十の嫉妬は笑いながら聞く
保釈金を届け女は姿消す
男とは可愛ゆきものよ酒に酔い
妻の鏡だんだん小さくなってくる

竹中 肖二
岩田 美代
月原 宵明
西出 一栄
沢山 福水
金井 文秋
不二田一三夫
宮尾あいき

鏡に向う女うしろは隙だらけ
化粧する鏡の奥に急な坂
人生をお悟りやすと大文字

津田 与史
小浜 牧人
河野 君子
山川 阿茶

川柳塔候補作品

大坂形水

不況風ロダンの首も垂れたまま
日履バス一人一人をつまみ入れ
夜行性又ラーメンを食べている
揺れている心みつめる終電車
ぼろぼろの心を洗う旅に出る
真ッ白に書いては雪の画にならず

高橋 古啓
高崎 雀声
山田喜代子
西山 幸
納 史葉

未練かな元の形のままの灰
いさかいのあとにピーポー車が走る

岸本豊平次
岡部 正則

對話する裏に動かぬ貌がある
笑い声小さな家からころげ出る

松原 寿子
江口 度

小浜 牧人

野良犬よ俺の分まで吠えてくれ
ぼろぼろの心を洗う旅に出る
融通無礙もう限界へ来た輪ゴム
大器晩成信じてくれる親がいる
菜の花のため息を聞くおぼろ月
信じたい風を待ってる曲り角
未練かな元の形のままの灰
疲れたら来いと大樹が呼んでいる

文川 野生
納 史葉
中村 優
藤原 健二
田中紀美代
大林曲ん手
園部 正則

車椅子の子に青空が広がった
鋭角に曲る若さというものか

田口 虹汀
牛尾 緑楼
江口 度

戸田 古方

虫の背ののって花びら歩き出す
貧乏と自分で云えるうちは無事
こうごうしいまで夕陽の木蓮
老人の独り住いの小さいゴミ
生涯は只一粒の花の種
落書を感心してる寺男
膚われの箆へ光輪描くはたる
観賞の眼がこの枝も邪魔と言う
子と同じ目の位置ならば賭けようか

池田 露子
三浦ひろ坊
小林鯛牙子
園部 正則
高橋 古啓
飯塚 虎秋
抽木 踏草
田中 紫浪

嫁さんの横に寝て居て平和かな

谷岡 芳枝
文川 一念

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

正 本 水 客

年の功にされて寂しい酔い加減

小林 孤呂二

寂しいとか悲しいとかの言葉で云い切ってしまうことは成可く避けたいが、この句の場合、寂しいはピタリ動かせない表現と云うべきであらう。

鏡に向う女うしろは隙だらけ

小浜 牧 人

しんげんに顔の造作に取り組んでいる動作が、うしろは隙だらけの下九に強調されていて面白い。

化粧する鏡の奥に急な坂

河野 君子

鏡の奥の急な坂、それは女性の眼にだけ見える急な坂である。

青梅の悲鳴が沈む壺の底

高橋 夕花

一読、悲鳴の語に違和感を覚えるが、読み

返えすうちに、上から上から押しつけられる青梅の声なき声を句主が感じとったとしても不自然ではないと思えてきた。

崩れても咲いてもバラは気促なり

和田 維久子

そう云われれば成る程そうだと思えてくるから不思議である。

如露の水トンボへかけて詫びを云う

高橋 千万子

素直すぎる程の軽いスケッチが捨て難い。忘れものだよ盗みをしなない猫なんて

不二田 一三夫

何か新劇の舞台を見ている感じ、ひねった脚本にニンマリしている作者の顔が見える。

不自然でない人形の三頭身

金井 文 秋

人形なれば三頭身も面白し。赤く咲く意地しか持たぬ花ざくろ

森 井 菁 居

花だけを咲き揃えて実を結ばないのを、ざくろの意地とみ、その意地を赤いと感じた句主の判定勝ちである。

老夫婦 邪魔にならない我を通し

遠 山 可 住

邪魔にならない我が、心とむようでも嬉しい。

聞き直す勇氣ないまま笑つとく

宮 川 珠 笑

そんなときの曖昧な女性の笑いが誤解を生む。

み悲劇を生む。

酒止めたり飲んだり後悔して見たり

市場 没食子

邪気のない没食子さんが眼に見えるようでも心うれしい句である。

破られた網は見つめて繕わず

野 村 太茂津

虚無感が強く胸を衝いてきて、空な漁民の眼が突きささる。

橋向う俵せそうに灯が見える

神夏磯 道子

川ひとつ向うに見える灯火は幸せな人が住んでいるような気がする。類句がありそうにも思えるが旅ごころの感傷を大事にしたい。

敵のない八方美人にある表裏

大森 孝 華

ドンデン返ししの恐ろしさ、お美事である。きつ先をこわこわ庇う鞆の奥

長野 文庫

鋭い刀のきつ先を受ける鞆の奥はどうなってるんだろうと子供の頃よく思ったものである。云い得て妙。

見るだけと雀 米屋に来て止り

西 森 花 村

見るだけが何とも可笑しい。教育ママとお預けをくつてる子供の姿を思い浮かべるのは行き過ぎだろうか。

寝所へ月カーテンは引かぬこと

尼 緑之助

上の句のリズムにちょっと引つかかるが、寝室のムードは大切にしたいものです。

寝所へ月カーテンは引かぬこと

尼 緑之助

上の句のリズムにちょっと引つかかるが、寝室のムードは大切にしたいものです。

秀句鑑賞

—前月号から—

西田 柳宏子

石段の一つ一つにある祈り

納 史 葉

私はこの句を見て先ず思い浮べたのが、亀の産卵で有名な日和佐の葉王寺の女厄坂、男厄坂の石段である。石段の両側に一段毎に一円のアルミ貨、或は五円玉が数枚ずつ置かれてある。詳しい由来や、置かれた一円玉の理由はともあれ、この句のもつ祈りが一段一段にこめられている思いが痛い程胸を打つ。視界ゼロ確かに前を向いている。

川上 富子

この作者のもつフレッシュな感覚句を私は好きだ。五里霧中、暗中摸索、こうしたあせりの中で、確かに前を向いている……或は自分だけそう思っているのかも知れない……自分を見失なわない姿勢に好感がもてる。

栄枯盛衰場末へ戻る鯛焼屋

中村 優

タイヤキ君の唄声に乗った鯛焼ブームは物凄い勢で日本中に鯛焼屋が繁昌し、遂には百貨店にまで進出した。が然し唄声が薄れるに従って鯛焼屋さんの店も再びものと下町の店に、或は夜店にその面影を留めている。いみじくも「栄枯盛衰」の語句がアンバランス的なユーモアを持っている。

先生の例えだけがよく判り

横田 放人

看板屋腹の立つ日はよく汚れ

三浦 ひろ坊

講演の不出来人歯のせいにする

小林 文月

以上三句よく判る句であり、何となくウフ

フと吹き出したくなる句。

浴衣着となれば氣やすく物が言え

柿谷 華王子

先ず眼鏡掛けねば話しがのみこめぬ

板垣 夢 醉

出世にも金にも縁のないびき

柚木 踏 草

小市民的な親しみ溢れる句と云えよう。

世を拗ねたきうりはまっすぐよう延びず

平井 露 芳

最近ではビニール筒をかぶせ真直にきうりも

矯正されるらしい。然しこのきうりは先天的

な拗ね者か？上五が説明調でありながら捨て

難いものを持つている。

限界に来た瘦身に注射針

文川 一念

愚痴もなくよう働いた古時計

伊藤 静 枝

一抹の淋しさの中にいたわりとねぎらいの

念が溢れる佳句、前者には悲壮感すら伺える

戦力のない外交で魚も逃げ

井上 柳五郎

二〇〇海漕を執り上げた句は多いが、ズバ

リ戦力のない外交ときめつけたのは立派

ドジなどこ似た姑で仲が良い

柴田 恵美子

ほほ笑ましい温味のある佳句、ともすれば

昔から嫁姑の句は相反目したような所が捉え

られ勝だが、こうした句が生れる家庭の温か

さが美しい。

魚好きの骨 うら返し裏返し

高橋 古 啓

日常茶飯事の中の一コマ、よく捉えている

と思う。何気なく見逃してしまふ勝ちな所を

軽妙なタッチでほほ笑ましく表現している。

思い出のヒトの残した本のシミ

波 ただお

思い出の人の残した数々の品はあるだろ

う。然し本の一頁に残されたシミにまでその

人を想ふ……想ばれる人は本当に倅と思う。

細かい気の遣い方に敬意を表します。

最後に本月の中で私は次の句を最秀句に推

します。

鋭角に曲る若さというものか

江口 度

単的に捉えた鋭角と若さの繋りの妙に敬服。

水煙砂

菊沢小松園選

西宮市 杉浦 婦美子

逝つた子のぬくみが残る縫いぐるみ
離縁状 女 迷わぬ色で押す

島根県 松本文子

裏道があると気づくも四十過ぎ
古傷にふれず再会さりげなく
手毬花手折れば虚勢散りはじめ
語られぬ記憶もあるう夏の家
秘そやかな予感でひらく今朝の窓
かりそめの言葉にすがる気の弱り

和歌山市 松原 寿子

逃げ道をふさがれてから強くなり
髪切つて別な私で生きてみる
夢ちよつと見ただけポーン消えちまい
くちなしの香り痛みが胸をさす
草の匂いさせて子供ら通りすぎ

八尾市 納 史葉

乱気流貴方の砦なら陥ちる
願い橋賭けても白い距離である
一方通行慕情いだけば鈴が鳴る
まっすぐな貴方へ心追いつけず
本音秘め涙は見せず楚歌の旅
片隅で縁の糸へ血が通う

松江市 梅本 登美也

夕焼けにもう指切りは信じない
雨だれのの一つ一つを胸にきく
想い出が逃げそう遺品の捻子を捲く
カンナ炎ゆかの子を越える何もなし
円満に露路裏同じ花咲かせ

和歌山市 西山 幸

朝市の蛸が吸いつく北の果て
正直な鏡がある日憎くなり
雑兵が負けすぎらしい妻をもち

花芯まだ青く噂の外に居る
バス停がいつもと同じ朝にする
散り残る花の重さに風迷う

炎天のひまわり計報まだ知らぬ
片隅のベンチに今日も恋がある

大阪市 文川 野生

一寸の虫を殺した手を洗う

前向きの男に一本の道がある

じゃんけんの鬼のまんまで別れた日

独り吹く口笛人を恋しがる

真つ直ぐに見る目に死角多過ぎる

北九州市 三上 春雄

エンピツの削りかたまで似るふた児

夫唱婦隨に物言いがつく更年期

健康が自慢で万年平社員

熟通い孟母にまけぬママを持ち

鳥取市 岸本 無人

アーケード此処から濡れない足になる

手袋に握手さされて気が変り

右の手の怪我を左の手がかばい

モナリザの微笑に似てるポーナス日

八尾市 田中 紀美子

美しい誤解のままに夫婦愛

ドラマ終え主役のままでお茶を入れ

隙のない女の部屋が見たくなり

早朝の電話一日乱される

唐津市 檜垣 岩光

留守番のトイレへ電話追つて来る

柔肌にふれて楽しくバス揺れる
強引にうばつた愛もそれつきり
泣けるだけ泣いて男の裏を知る

寝屋川市 柴田 恵美子

尾をふつていたらレールを敷いてくれ

信じないからおとし穴教えない

うちの前のこし打ち水威勢よく

恋に身を灼くと帽子が味方する

鳥取県 福田 保子

ちっばけな意地軒先で雨に濡れ

馬方の馬のリズムへ歩を合わせ

溜飲を下げるサザ波見てあかず

勢ぞろいハッピーのシミが気にかかり

大阪市 野田 君枝

サイダーの泡を見つめている禁酒

土産売る老婆に滝の由来聞く

昔からあるから拝む石地藏

泣き笑い廻す夫婦の走馬灯

島根県 飯塚 虎秋

父の日へ金では買えぬプレゼント

ヒョットコの面を被つてみたくなり

疑いを知らぬ笑くぼが突きささり

まあまあ的人生だった遠花火

寝屋川市 江口 度

ダルマに目入れて公約捨てにゆく

星影のワルツ樹海を眠らせぬ

赤い爪からウーマンリブの勝関が

赤・青のさかいめタイムカード押す

尼崎市 大垣 たもつ

夏草やぼうぼうとして分譲地

黒瓶に詰めかえて飲むサントリ

同情がまだ票になる選挙

富田林市 中村 優

その科白その人柄でまるくなり

さん付けのアクセントにある色気

御中の文面立前だけとおし

岡山县 池田 半仙

待つ事を知らぬ女が干からびる

愚痴云えて其の倅に気付かない

若い気も部分品が錆びている

岸和田市 池田 香珠夫

羽ばたきを止めぬ芭蕉の葉をしぼり

お世辞には弱い女で欺される

大和郡山市 今谷 紫園

標本になれば可愛い虫ばかり

愛情のちがいを犬に見透かされ

庭の花一人前に蝶を呼び

島根県 板垣 夢酔

見えぬから海のかなたにあこがれる

習慣の目ざめが邪魔な日曜日

おもちや屋へ手を引く子には負けられぬ

名古屋市 大林 曲ん手

夫婦愛喧嘩しながら米を研ぐ

八起き目は躓く石を丸く撫ぜ

ぶぶ漬けの音もさやかな京女

熊本市 有働 芳仙

地の果てを歩く足跡消してゆく

ドラマでは貧しい恋も花が咲き

午前二時屋台の酒へ女が来

鳥取県 加藤 茶人

勢揃い 女 女でする話

手離せぬ鏡となつて恋ひとつ

錦まだ飾れず故郷に遠く居る

東予市 小山 悠泉

きつかけを作る野心の煙草買う

玉の汗拭うか妻に見せようか

年金もアップ長生きしなければ

大和高田市 岸本 豊平次

遮断機が会いとうない人追い付かせ

婚約の彼が勝者の顔で来る

夕焼けも見せてくれないビルが建ち

東広島市 石井 さわ子

さしかけた傘に恥じらうさつき花
点滴の一つひとつに運をかけ

再起不能予告悲しく鶴を折る

唐津市 三浦 ひろ坊

惜しまれて去る平社員には通じない
タイムカード打てばここからあきらめる
檀原市 西本 保夫

父の日に三男と来たナポレオン
眼のふちを青く塗らなきや良い娘
千両の上はつかない役者の値

唐津市 田口 虹汀

定年の言いたい事も聞いてくれ

羽咋市 三宅 ろ亭

なる程とうなずく膳のかくし味
夜語りの長柄大橋今渡る
短命な花で力の限り咲き

倉敷市 齋藤 通風

独占への意欲未熟児室は荒れ
おそまつな心のぞかせ形見わけ
虫のんだ蛙を蛇が追つかける

島根県 角 耕草

テレビほけハッピーエンドをいつも待ち
参観日しいちやん来なくてよいと言う
売店にある茶菓子を出す旅館

羽島市 伊藤 静枝

魚試食悲壮な顔になりかかり
米俵要求ついでに東京見物し
海水浴浜の掃除は地元の子

尼崎市 中谷 利美

名優の化粧ばなしをテープとり
蚊遣する煙り気づかう児の寝顔
饒舌の女旅なり酒も添え

島根県 岩田 三和

タラップを降りるポーズも時の人
虫好かぬ伯母に似て来た妻の顔
一進一退ああ人生も半ば過ぎ

兵庫県 高橋 近江

ゆすりこむ心の袋まだ入る
妻だから腹八分目ほどに盛り
ゼット機で飛ぶほど日本広いかな

海南市 牛尾 緑楼

ゼスチャーの口止め効いて貝となり
雑草おも母なる土はよく育て
百姓の定年命のある限り

吹田市 藤原 世史春

患者より車の見立て上手い医者
病室で命も自分のものならず
病床に妻従えて昼寝する

唐津市 岩下 照沖

朝寝して独身貴族とは優雅
片蔭に風と遊べる馬の耳

長崎県 岩崎 和子

追いかけて傘貸す方がぬれている
仲人も無口にさすが閉口し

倉敷市 藤原 健二

見たくない世間へ眼鏡の度を合わせ
もう母の強さで着てる妊婦服

橋本市 田中 恒治

天の声地の声きいて良い政治
指切りがほんとなつて結ばれる

大阪市 堀口 欣一

若者がこんなに多い終戦日
石佛のここにもあつて京はよし

岡山市 船越 汽水

立飲みの酒に小銭の濡れており
新築の家の冷蔵庫が空で

羽曳野市 岩橋 双虎

電線に並ぶつばめへ明ける梅雨
長梅雨へ蝶の寿命を考える

香川県 田井 教之

仲間にも涙見せずに橋渡る
癖のない男でどこか物足らず

松江市 黒目 大鳥

風鈴屋橋の長さを鳴りつつけ

明日に発つ子連れ巡礼ねぎらわれ

松原市 北野 久子

女ざかりを後家の看板背負わされ
切なさを掻き立てられる梅雨の空

竹原市 古谷 節夫

憲法も新装オープンしたいかも
突然の雷雨ひまわり押し倒し

東大阪市 崎山 美子

梅雨空にテルテル坊主のならぶドヤ
弁当の重みがつらいあぶれた日

七尾市 松高 秀峰

下心あつて褒めると気がつかず
さからわぬ事にも馴れて父も年

岡山市 砂田 静佳

山はだか雨と雪との宿がない
雨の日の玩具の隙間の曇ふむ

青森県 波 ただお

水やればバラも笑顔で咲いてくれ
聖職も食べねばならぬストを打つ

唐津市 桑原 掬治

月の夜の虫静かなり二人ずれ
夏山に寂しく消えた虹の橋

唐津市 山下 勝一

時の記念日新幹線がまず遅れ
女四十貫禄みせた夏羽織

唐津市 岩崎 實

急いでも同じになつた赤信号
久し振りみんなしゃべって帰つたが

高松市 溝淵 美紀子

試すだけ試してやっぱ裏切られ
美味しいの一言妻は云われたし

鳥取県 金川 満春

日焼した顔で女はもう泣かず
天と海眺めて漁夫の朝が来る

尼崎市 中塚 喜甲

妻に酌ぐ酒にやましい心なし
蟻地獄にそつと自分を置いて見る

東大阪市 加藤 千代子

女性党思い上りを悟りしか
短大で何を学んで来たのやら

大阪市 新川 貞祐

飛ばされた風鈴いじけた音でなり
店番も出来ぬ男の髭立派

亀岡市 森 和堂

数だけを揃えばよいというものか
田売って家は建つたがさて暮し

大阪市 文川 一念

無精髭少年Aと思われず
笑うなよ笑うと奢りたくもなる

尾鷲市 渡辺 伊津志

筋金を通つた父の細い足
筆ペンを嫌う老女の心意気

熊野市 坪田 杉の子

いつ見ても会つても機嫌変らぬ娘
会釈してさつと座布団裏返す

大阪市 欄 蘭

雨に咲くあじさいほちほち色を変えようか
Z旗を掲げて平和な三笠艦

羽曳野市 麻野 幽玄

庇い合う心が愚痴にもなる夫婦
守り通した秘密も詰めて柩出る

今治市 園部 正則

父死ねばもう用のない里帰り
振り上げる鉄なくした蟹の事故

鳥取県 廣富 白峰

真直ぐに生きると阿呆が自慢する
女一人生きる嘘だとけろりとし

寝屋川市 香川 亜成

空天に文字を虚しく書くばかり
吊り皮に美人がいない本を読む

寝屋川市 小林 鯛牙子

麦藁帽三つ降ろしてゆく列車

豊中市 田中 善四郎

大臣はつかみどころのない気焔

尾鷲市 駒村 岳麓

出稼ぎの父より届くランドセル

出雲市 高見鐘堂

石畳二度の勤めは寺の道

大阪市 北 勝美

敬遠をされたと知らぬノンビリヤ

大阪市 岡田ふみ

趣味自慢はめれば長く聞かされる

山口県 高崎雀声

昼寝だけ医者指図を良く守り

大阪市 中辻千子

絵葉書に旅の息子の声を聞く

西宮市 山田喜代子

敬老と云われて親を思い出し

大阪市 内藤ますえ

君が代がやっと国歌になる騒ぎ

岡山市 井上柳五郎

人生はここに始まる披露宴

岡山市 清水金太郎

苔むした土蔵に祖先の意地しのお

米子市 佐伯越子

また雨か息子が土産を買つて来た

大阪市 平井露芳

小学三年の宿題へ一家総がかり

唐津市 筒井朴竜

二百海里見えぬラインが波に揺れ

八戸市 島田英二

次からは裏からおいで生みの親

大洲市 米澤暁明

全国区またまた主権を迷わせる

八戸市 紅葉山

裏づけが欲しい私服の眼が光る

岐阜市 市川鱈魚

野球馬鹿子は補欠でも胸を張り

八戸市 島田昭治

スナップのよくもとらえたいポーズ

土壇場で頼れるものは自分だけ

橋本市 森脇善彦

他人はそこ迄しか来ない溝がある

いくらでもスペアのある顔もされ

泉佐野市 大工静子

裸婦を画く良心と言うカーテン

聴えない見えない年金を頼り

寝屋川市 福富隆子

刷り硝子信じ裸になる女

東京都 池口呑歩

死亡欄年を比べる癖がつき

明日から矢面に起つ辞令来る
頂いた辞令手枷か足枷か
もう一つ仮面が欲しくなる辞令

雨やどりをしい娘に傘がくる
俄雨で軒下へばたばたと駆け込む。フト見ると、その中に美しい娘の子も交っている。同じ雨やどりにしてもこんな美しい娘と一緒に雨やどりをしていると思えば心がなぐさめられるのである。そこへ、その娘へ傘をもつて迎いが来る。近所の娘らしい。母親らしいのに連れられて帰って行った。あとに取り残された連中、鶯に油揚をさらわれたように眼をパチクリさせている。急に雨脚のはげしさを

麻生路郎選

評釋 古川柳の味

八木摩天郎清記

を感じた。

あの後家の数珠で打ったのは初手の事

若い後家というものは、兎角の噂をうみ易いものである。後家自身が何んとも思っていないでも世間の男が捨てて置かないのだ。寺詣りをすれば坊主までが口説く。はじめの程は数珠で打っているが、到頭しまいに陥落してしまふ。女の弱さを詠んだ句だ。

あの女房すんでにおれが持つところ

一寸シャンだからな。誰でもひつかかるよ

あれで格気深く、おまけに手癖が悪いというから、人は見かけによらぬものだ。すんでにおれがあれを女房に持つところだった桑原々々。

あればかり男かと母邪けんなり

あの男ばかりが男ではない。家のことを考へたら、親のことを考へたら、お前の思い通りにする訳にも行くまい。よくよく考えなさいというのはいち切れということなのだ。

相性は聞きたし年は隠したし

三世相を見てもらうのに、好きな男との相性は聞きたいが自分の年は隠したいと云った娘ころがよく出ている。

名題役者になると、そう度々は出ぬが下手な役者になると、前の場で殺されたかと思うと、もう次の場へ出て来る。又殺される。幾ら殺されても又外の役で出て来るので生きかわり、死にかわりと云ったのである。下手役者を痛烈に罵った句。馬の脚にはなりたくないものだ。

いづれの迎いがおこちこそうな腹
流連のづらだら遊び、家ではいくらまっても帰って来ないので、心あたりをそれからそれとたずねる。遂にいつづけをしているところをつきとめて迎いに来た。その女房は臨月でおこちこそうな腹を抱えているというのである。姑と夫との間に板挟みになった女房の苦しみを想像することが出来る。

石は生きたが死目にはあわぬなり
石は生きたが死目にはあわぬなり
何んでも耽るといふことは罪なことだ。鳥

驚を斗わして石は生きたが、親の死目にはとうとう逢えなかつたというのである。

芋の皮でもむころかと邪魔になり

十二月は押しつまる。お正月の料理で女房はきりぎり舞いしている。しかし男の方は払いもすんで、もう用がない台所へ出て来て芋の皮でもむころかと云って、かえって邪魔になるというのである。

売喰を女術の見込むこい事

浪々の身が売喰いをしてのを見た女術が、その娘の美しさに、あれなら売れると見込みをつけたというのである。女術に見込まれたが最後、娘の身が苦界に沈むのも時間の問題なのである。

牛方のおきらめてゆく俄雨

牛はそのそとしたものである。俄雨が降ったところで、早く逃げ込む訳には行かぬ。どうせ濡れるにきまつていると、牛方はもうあきらめてるのだ。

江戸っ子のうまれぞこない金を貯め

江戸っ子は宵越しの金はない金を貯めたものだ。金をためるような奴は江戸っ子のうまれぞこないだと罵倒したのである。

女湯へおきたおきたとだいて来る

軽妙な写生吟だ。女湯の中の女房の姿までが彷彿として浮んで来るではないか。殊に今日と違つて式亭三馬の浮世風呂時代を想像すると、「起きた起きた」と乳呑児を抱いて来た若い亭主の困り切つた態度までがハッキリ出ていて面白い。

(つづく)

愛染帖

橋高薰風選

夏の色炎えてプールに人が満ち

堀江 正朗

三分の一の胃に食う鯛の味
鯉が死ぬ病院の一大事

山根 白星

その次の出番の亀はうなずかず
少年の恋はめだかを呉れたがり

羽原 静歩

善人の足はじゅうたんなど踏まぬ
急所に触れると銭の音する

小出 智子

母のひざいつとはなしに猫の膝
生臭い風が受話器をとおりぬけ

藤川 良子

全部ひらいてこの掌の貧しさよ
わたくしは私の色で筏組む

宮西 弥生

中年の恋も火花に寄って来る
あじさいの色を殺して返事待つ

宇佐美和子

愛は淋しく淋しく降ってくる感じ
青春と言葉にすれば苦くなる

松原 寿子

日記帳虹を抱いたはこのあたり
あかね雲に笑顔を描く誕生日

河村 日満

警察と互角で論ず事故現場
散髪をして二三店飲み歩く

越子

踏まれても隙間に芽ぶく自我を持ち

佐伯

お茶席の女自嘲の私語目立つ

月原 宵明

決断を強いられ水平線眺む
踏切のどちらにも急ぐ顔ばかり

高橋 鬼焼

父の面布八月六日の雲を画く
打水が乾くと童話が死にそうで

小砂 白汀

欺かれて娘奪られにゆく父で
荒海へ稚亀は喜喜として帰る

榊原 秀子

祖父の忌と重なる縁桜桃忌
ふるさとへ出る月だけは変らない

神夏磯道子

油鯉何を訴えているのかな
半分を越して坂道楽になり

草深 醉升

政見放送しどろもどろなのも交り
一日中もの言わぬのも居る大家族

岩崎 実

片側の家並新し道の幅
立ち小便さわやかな風流る雲

遠山 可任

お大事な坊ちゃん鍛えようがない
ガラスの向うではい廻る夏の虫

西 いわを

駆落ちの二人井平らげる
病人と人種が違う見舞客

水粉 千翁

てのひらに名残りの雨をたしかめる

睡蓮を火宅の人に速達で
合縁にるいるいとある梅の種

どくだみの白と重なる祖母の顔

一票へきようも乞食とチンドン屋

老いた少年がベツ甲飴を買い
人前に出ると男の空元氣

鬼灯が亡母よ亡母よと赤くなる
川は流れて哀しい水もありぬべし

美しき掟に逢えぬ天の川

禁治産の男が見てる昼火花
赤い鼻緒にしよう独走の下駄は

夕暮や我より脆きものを賞す

急ぐ日のエスカレーターはとまってる

露草のむらさきに居る小さい風

香川県 三井 醉夢

青森市 工藤 甲吉

八尾市 高橋 夕花

富田林市 岩田 美代

大阪市 川口 弘生

和歌山市 西山 幸

島根県

東京都

守口市

大阪府

倉敷市

八尾市

神戸市

和歌山市

鳥取市

米子市

今治市

東広島市

島根県

島根県

大阪府

生駒市

唐津市

兵庫県

藤井寺市

倉敷市

風に聞く雲に名残りの道祖神

島根県

飯塚 虎秋

没落の悪夢吹き消す鯉のぼり

東大阪市

加藤千代子

女性党子供は誰が産むのかな

和歌山市

津田 与史

遠花火私は夢を見てるのか

八尾市

大路 美幸

掌の薄い女と握手して訣れ

豊中市

戸田 古方

枇杷の葉の暗さ発色しはじめ

寝屋川市

小林鯛牙子

原爆忌グラスフィッシュという魚

倉敷市

藤原 健二

メンズバック詰める秘密のない男

京都市

都倉 求芽

蚊を叩く音女とは思えない

岸和田市

池田香珠夫

田植機をイワンの馬鹿が押ししている

柏原市

大峠 可動

電線音頭首狩族の道化かよ

尼崎市

黒川 紫香

地の果てでじっと生抜く煙があり

藤井寺市

児島与呂志

返事より先に軀を持って来る

倉吉市

奥谷 弘明

ポンポンと言うからやっぱり記者らしい

竹原市

三宅 不朽

絵蠟燭会津の女人を恋わしむる

羽曳野市

麻野 幽玄

想い当る事ばかりなり癌で近き

岡山市

清水金太郎

文字読めぬ老母が確かな経を読む

岡山県

直原七面山

亡妻に似たホステスの名を聞いておく

倉敷市

小幡 里風

くちなしの白が匂うたそんな夜

岡山県

池田 半仙

花活けた室でどうして尖る声

大和郡山市

今谷 紫園

縄叩き持てばなつめる調になる

堺市

伏見 茂美

小料理や家のおかずにも似たり

唐津市

岩下 照沖

言い伝え不思議に生きて河童祭

鳥根県

堀江 芳子

野菜かご満たして退院かみしめる

倉吉市

今村 夕路

頑固には遺影の妻の目が光る

横浜市

菱田 満秋

瘦せた身へ暑さ貫き通るよう

宝塚市

吉田 笑女

あぶなげな橋も渡って共白髪

西宮市

藤村 べ女

倅せな暮しへ過ぎた人忘れ

北

勝美

大和路に箱に入れた山三つ

大坂市

山下 勝一

子一人を産んで斗士も凡となり

唐津市

西岡 洛酔

両の手に孫の温もりこぼれそう

枚方市

宮川 珠笑

汗の香の甘き抱く児に教えられ

鳥取県

清水 一保

肩で風切り大手を振ってる我が一票

唐津市

新岡回天子

よろこびを知らせる父は墓にいる

鳥取県

広富 白峰

エリートと言われた頃の夢で覚め

唐津市

筒井 朴竜

翁面打つ老境の座に憑きて

長崎県

岩崎 和子

足跡も指紋も消して黒い霧

富田林市

中村 優

一年を追う八桁の電卓機

堺市

高橋千乃子

朝帰り犬も今かという細目

八戸市

島田 某々

この頃は人寝めること楽しくて

京都市

松川 杜的

ズバリ皺かくしと分るサングラス

今治市

越智 一水

ゆううつな心紫陽花受けけず

神戸市

来任タカ子

靴ずれがますます痛い待ちぼうけ

松江市

岡崎 祥月

限界を越えぬペースでコマまわす

東宁市

小山 悠泉

反抗期親の思いはつながらず

大坂市

欄 蘭

思案した揚句一番安い指輪買ひ

唐津市 松垣 岩光

ここからは票田でない県境

唐津市 石垣 花子

子だくさん小柄な体で育て上げ

米子市 大坂市 新川 貞祐

散髪に千両箱が二つ要り

大坂市 文川 一念

少年の見つめる窓にある格子

八戸市 小泉 紫峰

将来を見込んで叱るとは知らず

唐津市 田口 虹汀

飛び出せば戻りはきかぬ丸木橋

唐津市 岩橋 双虎

鉢植えのナスを分けあう隣あり

羽曳野市 森脇 善彦

娘三人めでたい負債抱え込む

橋本市 小西 京

十年がたって似たものらしき顔

大坂市 竹中 肖二

空港で買った土産を忘れて来

東大坂市 田井 教之

仲間ならつきあえ恋のやけ酒に

香川県 竹中 綾女

バトンガールの若さ羨む野球場

東大坂市 桑原 掬治

あきらめていたがボーナスこの薄さ

唐津市 板垣 夢酔

都会へ着く笑われまいぞ田舎出と

出雲市 山本規不風

京都市

寝起きから鼻唄の出る要注意

松江市 岡崎 雪美

十年目孫負う背に老いを知る

八戸市 島田 昭治

本の虫そんな昔もあつたつけ

平田市 久家代仕男

ひと呼吸おけば怒りが薄れそう

和歌山市 若宮 武雄

さくらんぼトマトもナスも肌を売り

寝屋川市 宮尾あいき

帰省して蛙の声も子守唄

今治市 園部 正則

同情をしてもされたくない明治

松江市 梅本登美也

結局はマナーに疲れたフルコース

和歌山市 沢山 福水

雲有情人の命の儚さに

岡山市 井上柳五郎

生返事話滞る梅雨ごもり

具塚市 行天 千代

新刊の頁へ胸を弾ませて

岡山市 砂田 静佳

蝶とはうれし孫からオハヨーと

唐津市 三浦ひろ坊

石鹼で落ちぬ心のしみ一つ

羽咋市 三宅 ろ亭

コスモスの柔和台風にも折れず

松江市 黒目 大鳥

平和祭教徒一穂の火に焼る

大坂市 西出 一栄

大坂市

人恋えばロマンの诗情ひたひたと

〔評〕巻頭の句は、大きい悩みを持つ者には容易に理解のゆく、隣人慰勞の気持の表わられた句で、睡蓮は寺域の池に多く咲いている通りの清艶な花、ここでは抽象的感覚的に扱われている。火宅、とは、三界即ち煩惱の盛んなこの世を火災中の家屋に譬えていう。速達は現実感を濃く表現し、この句の性格がこれで形付けられ句に呼吸が通った。克明に分解説明し過ぎるときすぎずして来そうになる。

甲吉さんの句、辛辣な政治屋批判、诗情と適切な語句の使用（ベツ甲船）、軽くうがちを利かせての人物像と三句三様、ベテランの守備範囲の広さを感じられる。夕花さんの良さは作品に個性のあることだ。亡母追慕の情が鬼灯に映じて色を増すのだ。美代さんも個性のある句をつくる人で、禁治産、独走、といった陰翳の感じられる語をここでも駆使されている。立派な個性だからどんとん伸ばして欲しい。弘生さんは夕暮の心もとなき以上の、夕暮の心を表現された。幸さんの句の「居る」は秀逸で棲み描き、批判句などが多かったがその感覚もすばらしい。今しばらくは広範圏に視野を広げて作句されることだ。正朗さんの句は美感の尊さ。白星さんには亀でなければならぬという所がある。静歩さんのうがちは堂に入っている。智子、良子、弥生、美和子、寿子と女性が続き、作品は皆さんそれぞれに瑞々しい。そして最後の句の作者一栄さんは十月には七十五歳になられる。

川柳人と雅号

直原 七面山

六月号の川柳塔と水煙抄とを見ていて殊の外興味をひかれたのは三文字の雅号を持つ人が非常に多いと言うことでした。

川柳塔欄で二七・二%、水煙抄で二一・八%、両方を合わせても二五・二%で四人に一人は必ず三文字の雅号を用いている人が居るということになりました。

また誌寿六百号記念大会への出席者の中にも三文字の人が二四・七%もおられました。そこで電話帳を出して調べてみたのですが

一分間の柳論

最初のころはすらすら出来た五七五がだんだんむずかしくなり、壁の厚さを感じて「もうやめたるか」と誰もが思うことでしょう。だが上手下手より諦めないことを信条とすることが第一だと思えます。

職場の川柳愛好者に、川柳はどうして作るのか、どうしたら作れるのかとよく聞かれるが、その度にこのように答えているがこれは私自身にも言っている言葉である。

どの頁を見ても、三文字の名前の人は六%前後です。

で考えられることは、川柳人は普通人に比べてその四倍以上も三文字の雅号(名前)を使うことが好きて好きてたまらない人種だと言うことです。

では何故川柳人の多くの人々は敢えてこの三文字の雅号を好んで使いたがるのか、そしてまたそのメリット(効果)はどのようなかということになりますとそれがまだ何も分つてはおりません。

私は、今後俳人、歌人の雅号と対比研究する過程において、川柳人の精神分析(?)などをおこない、この隠された謎を皆様の前に明らかにしてゆきたいと思っております。その節は是非ご協力の程を……。

玉置 重人

終点の無いこの道は、あせることなく倦まずたゆまず根気よく歩き続けることによつて、何かに躓き何かを見つけて自分のものにしてしまふガメツサ。そういうことの積み重ねによつて自分の句を通じて自己を主張する川柳のすばらしさが生きてくると思つています。

自分の「らしさ」が表現されている句、そういう句が出来たらと考えています。

第11回 東大阪市文化祭参加

第5回 川柳大会

日時 昭和五十二年十月二日 (日曜日)

正午開場、出句締切一時半
場 東大阪市立中央公民館二階
視聴覚教室

柳 会 話 (近鉄永和駅すぐ南、市民会館内)
「足踏みをすな」
川柳塔社・副理事長

兼題及選者 (選者、姓のアイウエオ順)
魂……………伊藤 勢火氏
あの人……………上野 山照氏
悪筆……………大神 古梅氏
未練……………金井 文秋氏
旅情……………香川 醉々氏
紙……………河内 天笑氏
港……………久保田 寿界氏
風……………田中 桂太楼氏

席 題 選者……………珍齊源次郎氏・片岡湖風氏

出 句 兼・席題共各題二句以内 (締切一時半厳守)

賞 出句は出席者に限る。(兼・席題共当日会場で受付)
各題最優秀句に東大阪市長その他の賞状及び副賞を贈呈する。

会 費 五百円也 (呈・大会句報) 貳千円也

懇 親 主 催 東大阪市文化連盟・東大阪市川柳同好会
後 援 東大阪市・東大阪教育委員会

川柳塔社物故同人

(第2回)

不二田 一三夫

ウイロー社の長老だった。

—短気な男 自分の墓も建て

垂井葵水(和歌山市) 48年11月1日五十二歳

本社参事。朝日新聞和歌山版柳壇選者。川

柳「わかやま」主宰。如水—逸水—甫水—葵

水と、代々の俳号である。尊父甫水氏は財界

の巨頭として和歌山商工会議所正面に石像と

して遺されている。葵水氏は名吟家であり社

長業も抜群。立命館大学の支部長等、密度の

高い人生を歩んだ人。—垂井葵水遺句集があ

る。川柳塔社の交通禍第二号。

—世の中のいのちを母に宛めたし

福島鉄児(門真市) 49年12月9日 六十五歳

柳社で最も知名度の高い弓削川柳社育ての

大幹部。家庭の事情で弓削から大阪へ移って

からも弓削川柳社の発展のために尽くす。

—水に写つて見れば我家も美しく

永宗宗義(岡山県) 50年4月8日 五十九歳

昭和64年4月7日句碑除幕—11月12日の誕

生日に句集「高瀬舟」発刊(現在川柳塔社で

昭和47年9月号へ「ああ川柳塔社物故同人」を書いて、五年になる。「川柳雑誌」

改題いらいの物故同人)

川柳忌の九月号に、その後の物故同人を列

記し、心からご冥福を祈りたい。

まずその前に前回書いた方々の雅号と逝去

の日と年令を再録する。

戸倉普天(41・6・26 || 78) 長野井蛙(41

・7・25 || 67) 松江梅里(42・6・28 || 60)

木村十悟(42・8・21 || 63) 脇田勇(42・11

・13 || 71) 河相すゝむ(43・9・19 || 64) 那

谷光郎(43・12・10 || 74) 工藤安亭(44・1

・29 || 65) 服部十九平(44・2・25 || 67) 関

戸宗太郎(44・3・3 || 43) 井上旭峯(44・

7・19 || 75) 礮弓彦(44・12・3 || 40) 後藤

梅志(45・1・15 || 77) 藤本礎山(45・2・

8 || 59) 橋本緑雨(45・4・16 || 78) 島野大

吉(45・8・2 || 63) 清水白柳(45・11・12

|| 65) 伊藤泉睦(46・1・9 || 46) 桜川不水

(46・7・7 || 73) 平尾太希志(46・9・7

|| 58) 酒田清子(46・9・5 || 60) 宮地双葉

(46・10・29 || 75) 川岡露眼子(46・11・13

|| 64) —退会後の同人は割愛。

若本あき坊(ハワイ) 47年7月27日八十二歳

若本多久志氏の「いとこ」に当る。ハワイ

価三百円で取次いでいる)

句碑は

―極楽へ行かせて欲しい鐘を撞き

永尾英断(兵庫県) 50年5月10日 五十四歳

川柳塔になってから交通禍第一号は服部十九平氏、第二号が垂井葵水氏、第三号が英断氏となつてしまつた。

国鉄マン。世話好きで、責任感の強い人。

亡母を思う孝心から八十八カ寺ほか、各地の観音詣りを発願して自宅に帰るのは月のうち三、四日だった。遺句集「遍路一」がある。

―満願へ首のタオルは凍つたまま

今西章雅(大阪市) 50年5月28日 六十七歳

西成区山王町で薬局を開業していた。山王町には須崎豆秋一門が多く住んで川柳の盛んな町だった。他社にも投句するという多作家でカスバ西成の句が多い。

―総評に変わっただけの釜ヶ崎

水谷竹荘(大阪市) 50年6月20日 七十三歳

大阪逓信病院「鳥ヶ辻川柳会」のメンバー

で、先きごろ逝去された富士野鞍馬氏にも知遇をうけ全国的に交際の広い人だった。食通としても有名

―さし上げた傘が追い抜く戎橋

福井野迷路(大阪市) 50年7月6日八十三歳

海軍々医中將。東郷元帥の主治医としても有名。スケールの大きい人で体格も堂々としていた。よい日本人の最後の人。

―赤旗を何故 左手で振らないか

田中万作(和歌山市) 50年8月25日六十二歳

川柳「わかやま」の名吟家の一人。彼は恋に生きた人である(太茂津氏)と云われる。

―悔いてまた悔いて悟りを開かれず

池田古心(岡山県) 50年11月29日 七十歳

川柳塔社参事。「川柳かぐみ」主宰者として活躍。自転車で山を越えて句会に出席する人がいるという。「鏡野川柳社」育ての親。―地獄から迎えが来ぬよう数珠をもみ

井上湧三(大阪市) 50年12月22日 七十七歳

警察病院名誉院長医学博士。麻生路郎指導の阪大川柳会のメンバーである。川柳人としては多作家ではなかったが、旅の句が得意だった。

―伯林の夜を君 黙々と歩く気

北川春譽(枚方市) 50年12月27日 六十二歳

柳人医博として、その才筆は川柳塔社の代表的存在。「川雑」時代に理事長、川柳塔となつてからも副主幹として社の重鎮だった。

大病院の院長ほか医学界に尽力され、その物腰のやさしさは多くの人から敬愛された。著書に「聴診器」がある。

―われながら完全癖に腹が立ち

堀内暁風(大洲市) 51年3月1日 七十六歳

東野大八著「人間横丁」にも紹介されている人である。昭和六年に故今川掠影と「ひじ柳壇」創立、水郷川柳社の草分けとして「川柳雑誌」から「川柳塔」へと生き抜かれた。―この世ではもう用済みで立つ浄土(辞世)

阪上十止庵（大阪市）51年6月2日 六十歳

故白柳、小松園、雀踊子諸氏で出していた

「川柳若葉」時代に学生服の丘遊舟という雅号が十止庵だった（雀踊子氏）また阪上稔夫のペネで、三行コントでも名を売っていた。

—この命捧げるひともなくて春（未発表）

山田季贊（高槻市）51年6月20日 五十歳

とにかく柳界の名物男だった。一年間の句会出席二六三回という記録は当分破る人が出ないだろう。毎月平均二十二の句会場を走り回ったという人である。遺句集「鉄道草」が発売中である。

—親子して新幹線を造る職

森田茗人（鳥取市）51年8月27日 六十二歳

川柳塔社参事。日本海新聞、サンケイ新聞

鳥取版の柳壇選者として多くの川柳人を育てあげ、人望のあつきは今だに慕われ茗人忌が今年から催されることになった。句碑「風の糸のばして風に逆らわず」。句集「うみなり」ほか。辞世の句は

—まだせねばならぬことあり 死をおそれ

福井多蘭子（大阪市）51年12月23日六十三歳

元憲兵少佐とは、どうしても考えられない温容な人だった。野外演習が得意で、当時の山下奉文、梅津征四郎、畑俊六各閣下から破格の賞讃を受けた。戦後は東洋蘭の育成に専念、中に天覧に浴したものがあり、雅号の多蘭子はそこから生まれた。

—人はみな青天井の下に住む（遺句）

吉田水車（名古屋市）51年8月25日七十四歳

川雑不朽洞会々員の古豪。かつては奉天に居住し、大陸同窓会にもよく出席していた。

筆まめな人で本誌にも小品をよく送ってくださった。

—割箸で指すもあわれや壇の浦

小川静観堂（伊丹市）51年9月15日八十九歳

陸軍軍医大佐。数多くの陸軍病院院長を歴任され、福井野迷路氏と軍医将官の双壁。

路郎先生が北支那視察当時の写真が51年9月号の「麻生路郎物語」のカットになった。

句集「はいまあと」昭和45年版がある。

—いつそちぎろうかシャツのぶらぶら鉤

葛城伊三郎（岸和田市）51年・10月3日

六十九歳

洋品雑貨商「かつらぎ商店」を経営。高橋操子主宰「岸和田川柳会」の人気者で、その名物「裸踊り」は圧巻だった。しかし岸和田市民生委員ほか、堅い役を多く持ち町の功勞者でもあった。

—ひそひその話はみんな金のこと

諸氏のご健康を祈りあげます。

★

物故同人の中には、ほくが同人に推薦した方が数氏おられる。そして先輩が、または後からつついて来た方々。みな好い人ばかりであった。

▼川柳わかやま句会は9月18日午後1時から和歌山市小松原通垂井ホールで開催。

題は「ポスト・覚悟・戻る」。席題は一題。兼題は3句。席題は2句。投句郵券一五〇円。和歌山市駕町一五・野村太茂津あて。

宝善院徳寿安詠居士

ああ

富士野鞍馬先生

不二田 一三夫



富士野鞍馬先生が本年7月10日、再入院されてきた東京船員保険病院で亡くなられたことは各誌で、すでに書かれているが、まこと痛恨がわまりないことである。

一度もお会いしたことはないが、執筆者と編集者としては二十年以上もお世話になってきた。一本誌としても大きな財産を失ったことになる。毎号読み物の一本の柱として本誌の一角を支えてきてくださっただけに、かえすがえすも残念なことである。

「川柳雑誌」の24年9月号に「神泉苑の雨乞」を書いていただいたが、その頃からご執筆ねがうようになったのではないかと思っ
ている。その後は毎号ただの一回も休まずにご寄稿いただいた。
各誌にも執筆されていたが、先生はとくに

わが社には力作を寄せられていたようで、日頃から感謝申しあげていた。ご執筆中のものが終回に近づくとき、かならずご相談を受けたものである。49年7月号から「百人一首と川柳」をお願いしたのだが、そのころから心臓喘息で少し弱っていられたようだった。「百人一首が完結するまで、あなたに迷惑をかけるないようにしたい」と、気弱いことを云われたこともあった。「百人一首と川柳」がおわる数カ月前に、二三の題名を送ってこられたが、その中で一番の大作「源氏物語」をお願いした。資料はちゃんと揃っていたはずだが、ついに神は先生にペンを執らせなかった。平安の福永清造先生も書いておられるように、先生は書家としてもプロ級のように「川柳新聞」の題字も先生の筆ときいている。六月二日のおハガキはほくもいただいている。その後のお便りは代筆である。あれほど

達筆な先生が、昨年12月14日、病院からいただいたおハガキだけは読みづらかった。そんなご病状なのにペンを執られる先生のお心には胸を打たれたことだった。
先生のおハガキの裏面にはいつも筆で句が書かれてある。用件は表面の下段に線を引いて数行の走り書き。毎日何通ぐらい書いておられたのだろうか。

先生は情に厚い方だったらしく、先生のお友達が亡くなったとき、その遺児三人を大学卒業させ、りっぱに社会人として成長させた美談がある。その頃、先生の奥様が亡くなられて数年後、その遺児たちの祝福をうけて遺児の母なる人が先生と結婚されるなどは美しいドラマを見るようである。

柳歴は、大正5年に「紫川柳社」創立、柳誌「むらさき」刊行。同11年、川柳久良俊社幹事。昭和4年、番傘川柳社同人。同9年、句集「川柳鞍馬集」刊行。同10年、「川柳講座」久良俊と共著。文芸情報社発行。同31年京都市長より表彰。同34年、句集「人生譜」刊行。同42年、川柳人協会より川柳文学賞。同46年、阪井久良俊の碑建立「久良俊伝」刊行。同48年、氷見市に句碑建つ「ちる桜また来年は咲くさくら」ほか。

先生の原稿で、一番に注意したのは「富」という字だった。印刷所がよく「富」で組んできたからである。

（明治28年10月13日京都市生一本名安之助）

防 災

塩 満 敏 選

増水の川に監視をおこたらず
 結局は机上論なり防災展
 防災へただ一言で足る標語
 旅先の妻元柱へ念を押し
 防災の予算も組んで議会閉ず
 暇なのが防災訓練に狩り出され
 非常口見届けてから幹事ねる
 治山費の無駄と読んでる小役人
 防災のところがあつた砂袋
 野仏と竝ぶ水泳禁止札
 防災に非常袋が見直され
 防災を誇る工場も神祀り
 防災へ保険一口のれと言う
 防風林歴史の重み知恵ひとつ
 防災のお札も煤けている平和
 防災へ気休めの札ぶらさがり
 土肌をむき出し防災何時も後手
 あきまへんあきまへん防災でも儲け
 台風の手抜き工事を見破られ
 保護色は防災のため鳥、けもの
 大ナマズあばれ出す日はきめてなし
 防災へ成田さん手がまわりかね

越 子
 登美也
 操 子
 春日
 七面山
 ふ み
 弘 朗
 方 大
 カズエ
 春 栄
 俊 風
 祥 月
 茶 人
 洋 々
 道 子
 秀 峰
 古 方
 素身郎
 ふ み
 弘 生
 玉 子

旅の宿先ず非常口確めて
 防災に古老の知恵を一つ入れ
 竹やぶが防災適地すずめ達
 防災へどろなわ式という予算
 許可保留防災工事再点検
 輪中村災害うけて見直され
 落石注意どないにせえと云うなら
 防災に王手飛車手はないか
 視界ゼロ錨は入れたまま霧笛
 防災へ梯子車め組の意気で来る
 笑われて又確めて見る火元
 防災の貧がまねいた悲劇の日
 ぼやきつつはずしてうれし窓の板
 土砂崩れ列車に知らず発煙筒
 台風へ釘金槌をたしかめる
 防災へ人事を尽し天に待つ
 台風へ土下座ばかりはしとれんぞ
 消火器の埃へ無事な日が続く
 お役所の防災「落石注意せよ」
 防災の歴史は哀し人柱

つね
 伊津志
 三和
 度
 翁童
 静枝
 みのる
 勝一
 里風
 右近
 洛醉
 満津子
 喜洗
 曉明
 朴竜
 三十四
 芳仙
 木魚
 弘生
 白水
 太茂津
 本蔭棒
 岩光
 一路
 双虎

敬 老

大 山 と 金 選

炎天下ガードレールの修理工
 大雨にずぶ濡れになり杭を打つ
 治山治水やつぱり政治の第一歩

敬老の名だけが宙に浮いている
 シルバースhirtこさえ敬老したつもり
 利用度数減る頃老人無料券
 修身のある頃敬老など言わず
 うれしくも淋しく席を譲られる
 敬老と立てば若者チョンと掛け
 席空けてくれたおもたら降りるんか

敬老の酒に選挙の匂いがし
 敬老の果て敬老の端に居る
 石女の果て敬老の端に居る
 敬老の酒に選挙の匂いがし

虹汀
 昭神
 金太郎
 干子
 弘生
 保夫
 宵明
 虹汀
 みのる
 古方
 正則
 岩光
 本蔭棒
 芳仙
 軒太楼

同窓が居て若くなる敬老会
漫柳
若返り会と呼びたい敬老会
七面山
敬老会一日だけの笛が鳴り
越子
敬老日昔匂わす三味が鳴る
どんたく
敬老の舞台で踊るうちの嫁
操子
敬老の心へとける 舞扇
悠泉
敬老会飛び入り詩吟も登壇の
近江
敬老日酔えば軍歌となる
照沖
敬老日明治のよきにうまが合い
春雄
来年を約して帰る敬老会
隆子
敬老会話は嫁のことばかり
勝美
としよりを園児唱歌で慰める
登美也

プレゼントだけ届いた敬老日
道子
財産分けてから敬老遠くなり
三十四
手づくりの馳走何より敬老会
晓明
敬老日だけは子もくる孫も来る
綾女
「敬老」と言つて饅頭くれる孫
恒治
小遣錢あげれば孫のものを編み
実
敬老の一日湯疲れしてもどり
洋々
わが家が良いと敬老日の昼寝
伊津志
敬老会一生なまけた身を恥じる
三和
よしあしは別生き抜いて祝われる
豊生
労わりへ素直な老の意地徹す
太茂津
×
敬老の日もこそこそと動く祖母
右近
敬老の日もなく夜警の靴をはき
花子

敬老の日は病葉もそつと散り
俊風
敬老の美しい名で差別する
×

残 暑

安平次 弘道選

倒産噂のしきりに聞く残暑
正則
まだ続く残暑へビヤガーデンが混み
洋々
残暑まだ流し冷麵客を呼び
軒太楼
大根の双葉残暑の空を指し
無人
色褪せたTシャツ残暑の街を行く
越子
暑いともいわず残暑の鬼瓦
古方
ぶらぶらと残暑へ太るへちま棚
木蔭樺
下界から残暑見舞の来る避暑地
芳仙
葉鶏頭残暑たのしむ色になり
無人
残暑なお蟬の命のありつたけ
保子
残暑まだつづき梨の値が高い
夕路
残暑なおきびしき中の毛皮ショー
どんたく
月並みの残暑見舞が来た残暑
肖二
ハンカチの白に残暑のまだ厳し
洛醉

無駄足に残暑の汗がどつと出る
花子
夕立ちが欲しい残暑の草いきれ
悠泉
落選のピラも残暑へうす汚れ
洋々
思い出の砂山崩れ浜残暑
勝一
豊作を残暑約束してくれ
木魚
水喧嘩残暑の中できいている
古方
残暑今萩は出番を整える
白水
残暑も酷暑もない蟻の列
道子
残暑きびし冬まで病妻は持つだろか
七面山
病人が彼岸を待つている残暑
宵明
水源地干上り残暑照返し
花子
合服がまだ落着いてない残暑
可住
夏ばてに追打ちかけて来る残暑
肖二
台風一過残暑のかけら持つて逃げ
洋々
風鈴がびたつと残暑に耐えている
春栄
浅漬の茄子に残暑を労わられ
カズエ
焼茄子がこんなに美味い残暑です
春日
ざわさわととうきび揺れて汗滲む
勝美

年々に残暑こたえて老いの坂
道子
残暑お見舞田舎の風を送りたし
春栄
つる枯れの西瓜ごろごろして残暑
本蔭樺
街残暑針がコトリと花時計
照沖
変電所のヒューズが飛んで残暑です
度
都市砂漠残暑の窓に花がない
肖二
地
晩学の辞書の重さよ秋暑し
照沖
天
指環がスツポリ抜けておこちる残暑
素身郎
軸
秋の序曲残暑きびしき中に聞く

初歩教室

題 — 「信」 —

本田恵二朗

自分の好きな言葉で感動を表現するすべ
身につけた川柳人は倅せものである。その感
動が純朴なものであるのも川柳の特殊性であ
ると思う。句の思想性、感覺性、近代性を忘
れてはなるまい。そしてそこはかとなくかも
し出されるムードが欲しい。古典を知り、そ
の佳さを敬愛しながら近代的な感覺を表現し
描写し続けたいものである。

格式と美貌の過信縁遠くし
(格式と美貌の過信へ縁遠く)
赤信号二代目頑張り点滅す
(二代目が赤信号へ四苦八苦)
ちぎれ雲道を信じて一人行く
(信念の道へ孤独なちぎれ雲)
もう一度信じてよう信じよう
(独りゆく道信じてよう信じよう)
もう一度だけ信じよう和解する
(もう一度だけ信じよう和解する)
信念で苦難の道を切開き

岳 麓
同
九二老
冬 扇
同

(信念が次の道を踏みしめる)
信用をつないだかわり資本切れ
信じてる話気楽にものを言い
(信じ合う舌が気楽に動いてる)
自信ない鉄に盆栽さいなまれ
信じてるつもりひがみもあるけれど
(信じてる心の隅にあるひがみ)
不信感過大広告行き詰り
(過大広告が不信感呼び起し)
信用を買つてもらえぬ紹介状
(紹介状だけでは信用してくれず)
彼の腕信じ漕ぎ出す舟に乗る
(彼の腕信じ切つてる船出です)
信じてるから物を言ひものを食べ
(信じてるから言ひもする食べもする)
ゼロばかり増やす政治の不信感
(ゼロばかりふやした続ける政治不信)
カラフルな葉が慢性不信呼ぶ
(カラフルな葉が慢性不信呼ぶ)
青い空明日もあるから信じてよう
(青い空があるから明日を信じてよう)
信すべきその筋からというニュース
(その筋からのニュースですと信じさせ)
切り札を持つてる自信が笑みたたえ
(ほほ笑みで自信の切札包んでる)
あいまいな語尾が不信の決定打
(あいまいな語尾が不信に輪をかける)
迷信といえども悪気でするで無し
(迷信のとりこでお人好である)
再建の決意社長を信じ切り

頼 次
同 美
同 幸
同 紀美代
同 貞祐
同 露芳
同 柳五郎
同 保夫
同

(再建の社長の若さ信じよう)
信仰を手とり足とり迫られる
信頼のハンドル任せて曲折し
(人生行路夫のハンドル信じ切り)
全快を信じる夫の手足拭く
ぐち言うまい信じて押しした保証印
中傷の誤解が解けて信じ合い
(中傷と判つた何が起ころうと)
信じ切つた絆だ何が起ころうと
(信じ切つた絆だ何が起ころうと)
このまふ伸びて欲しいと通信簿
背信のうしろめたさが黙らせる
札束に脆くも信念とぶに捨て
(信念の塔 札束にくずれ落ち)
積善の余慶を信じて待つている
自信過剰落し穴など目に入らず
善人のやたらに相手信じ込み
(信じ過ぎまただまされたお人好し)
母の愛怒りながらも子を信じ
(叱るとき子を信じてる母性愛)
夫婦喧嘩不信の目でららみつけ
(倦怠期不信のままざし濡れている)
信じる目いつもニコニコ潤潤油

静 枝
同 人
同 寿子
露 杖
同 則
同 喜美代
同

投句にお便りに

川柳塔柳箋

一冊百五十円・送料二百円(二冊でも)

(ニコニコと信じ切つてゐる目の動き)

信じ合う二人の心に嘘はない
(信じ合う心に虚飾の影がない)

お互に愛を信じた今日の幸
(信じ合う愛へ大空澄み渡る)

親と子の空間信でうずめよう
(親と子の隙間を信頼感で埋め)

信じてる妻にすまない三次会
信念の男人生狭くいる

信じたり皿投げ合つたり夫婦坂
炊事場は私でなければもつ自信

(私だけの自信がこもる厨です)
信と疑と会議決裂泡残る

(会議不調信疑こもも泡となる)

三十四

同

同

同

同

同

同

信仰が実力以上の力出し
(信仰が三の力を十にする)

背信の夜の屋台の酒にがく
信じ合う意見が痛いところを衝く

信用をされて鉢巻外されず
信用の重さをのれんは知つて

信条は胸にたたんで平社員
信頼をする外はなしメス光る

信用は出来ぬが悪人でもなきさ
信用と貯金を天秤にかけられる

押付けの信心神さまあきれさせ
過信した傷だ自分で手当する

信憑の誤算罫にかけられる
信じ合うゆくてに交叉する色道

強制をする信仰に溝が出来

翁童

同

同

同

同

同

同

同

信用を死守する心見直され
石崖を信じて雲突く天守閣

濡衣を裸になつて信じさせ
信じてる同志無駄口叩かない

信心深いと言われる人のエゴイズム
信じ合う隣と鍵をあずけ合い

能書ほどでない売薬また信じ
反省をしてる子の目だ信じよう

迷信とは別に鬼門をよけて
助つた一瞬神さま信じてた

同

同

同

同人

同

同

同

同

同

同

同

雅号ぶつちやげばなし (161)

ほりえ



堀江芳子

よしこ

今度こそ男の児をと、三度目の出産に期待をかけたのに両親は私の責任のように愚痴っぽく聞かされたものです。それも年子が三組、長女と六女の年令差が九つ。よくも半ダース女ばかり揃つたものと年を取つて親の苦労が身に沁み入るようです。芳しく育つようと祈りをこめて付けられた芳子は、名前負けしたようにパツとしませんが、何度が生命の危機を救われました。いつか明朗さんが芳子を「芳香」と書いた方がいいと言つて下さったのですが、親に貰つた名前が一番良いからと芳子で地道な歩みを続けて行きたいと願つてはいますが、相変らず足踏みばかりで何時になつても至つて芳しくない芳子です。

(五十五歳)

この句の狙いは?

合鍵は鳴らない鈴をつけられる
帛旗打ち振つてふたつの乳房やってくる
トタン屋根の乗素直に落ちて行く

右についてのご意見ご感想をお寄せ下さい。集成後プリントをお届けします。

(無料)

伊丹市西野外川原11の70

櫻谷漫柳宛

題一正一9月20日締切(11月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四
●七一一

本田 恵 二 朗

大 萬 川 柳

「箸」 入選発表

選者 川村好郎
投句総数 五百九十五句
入選 七十二句

猪口ためて幹事は箸に手も付かず

そうめんに抵抗している輪島塗

酒ぐせの悪さを知つてる箸枕

鳥取 露 杖

夏バテを知らない箸の動きよう

泉北 春 栄

南無阿弥陀金の入歯も拾う箸

岡山 静 佳

一本箸立てて人生幕がおり

大阪 真 砂

箸割つてくれる女と旅の宿

八尾 幸 生

席順が狂わぬ箸でつがなし

東大阪 三十四

箸だけは右手に持たず癖をつけ

大阪 一 栄

割箸が他人の顔する妻の実家

大田 軒太楼

思い出を又聞かせてる箸袋

堺 天 笑

塗箸に心のあせり見抜かれり

神戶 牧 人

箸袋思い出手繰る数え唄

五つ児の箸にママのいくさがある

物思い箸に心を見抜かれる

大 阪 千 子

銀婚の揃いの箸も割げてくる

村 山 金太郎

木の小枝が箸になつてるキャンブ

八尾 美 幸

孫ひ孫その真中にある夫婦箸

はしまめと云われた頃はよく努め

その箸の重さ軽さよ斗病記

箸とれば折るその手は母ゆずり

祝い箸おし頂いて母米寿

噂気にしてか女の箸が拗ね

一周忌まだ捨てかねてる夫婦箸

名物を褒めあつている旅の箸

声にならぬ声友の訃へ箸が落ち

添いとげたのが実感となるお箸紙

売上げの割にお箸がたと減り

朝刊の政治へ箸をふるわせる

大 阪 君 子

割箸がちんばに折れて不がよぎる

子の箸が祭太鼓に落ちつかず

食べさせてあげる笑顔がづらい箸

胃下垂を妻に話していいない箸

箸枕刮れて女酔つていい

箸袋変つて気ままな旅つづく

割勘の箸の動きがせわなし

同権のはずれ大小の夫婦箸

口で割るから割箸すねて折れ

夫婦箸夜は仲よう箱で添い

箸袋旅の余情をつめてくる

祝箸冷えた心かとけてくる

蚤の夫婦に似合わない夫婦箸

目で食べる料理にうれし箸枕

上げ下げの箸に敵しい子の躰

箸枕聞いてはならぬことも聞き

大阪 道子

軽々と七十余年を拾う箸

残り物ばかりですます妻の箸

値上げなど知らぬ子等の箸でよし

奈良 本蔭樺

佳句

手料理を褒めてちつとも箸つけず

親がまだ許してくれぬ夫婦箸

兵庫 つき子

招かざる客が真先箸を取り

大阪 一舟

真心を素直にうけた箸を置く

大阪 智子

切り出せぬ話へ箸が重くなる

和歌山 幸

割箸の宿命一度で捨てられる

耐えぬいた暮しの染みる夫婦箸

大田 軒太楼

人ノ句

何時の間にか離ればなれの夫婦箸

和歌山 与史

地ノ句

再会の箸は動かさず煮えつまり

堺 一二三

天ノ句

重い日も軽い日もあつた夫婦箸

大阪 道子

選者吟

気がつけば上座は箸をまだつけず

昭和五十二年度

ベストテン (七月現在)

一天笑

二一〇 堺

二 花梢

二〇・五 富田林

二〇 鬼遊

八・五 八尾

三 蕪祐

一五・〇 堺

二一 としよ

八・五 和歌山

四 好一

一四・〇 大阪

二二 弥生

八・五 八尾

五 幸砂

一三・五 和歌山

二三 静泉

八・五 鳥取

六 真一

一三・五 大阪

以下略

七 一二三

一三・五 堺

昭和五十二年第十回

八 美幸

一三・〇 八尾

「限界」五句以内

九 夕花

一三・〇 八尾

締切 九月二十五日

一〇 幽玄

一二・〇 羽曳野

第十一回

一一 可住

一二・〇 兵庫

「気まま」五句以内

一二 軒太楼

一〇・五 大阪

締切 十月二十五日

一三 美幸

九・五 奈良

一四 本蔭樺

九・五 大阪

一五 道子

九・五 八尾

一六 幸生

九・〇 西宮

一七 多久志

九・〇 箕面

一八 一本杉

八・五 大阪

一九 智子

諸氏。

秋田 實

主幸・不二田一三夫編集

『漫才』 復刊第8号発売中
価三百円 送二百円

(寄席に関する川柳欄を設けました。
川柳道場ではないので川柳の上達は望
めませんがお気軽にご投句ください。)

〒514 大阪市生野区勝山南1-14-17
漫才作家くらぶ

川柳塔社常任理事会 (八月四日)

連日の猛暑に足がにぶるだろう。そんな
不遜な思わくがうれしくはずれ、座布団が湯
のみ茶碗が、ポットの湯が足りないという騒
ぎだった。

静養中の若本多久志氏のその後のことは小
松園氏によって、快方に向いつつあるという
吉報だった。また入院中のいわを氏や静馬氏
も経過良好で、これは見舞いに行かれた葉、
薫風、牧人諸氏によって明らかにされた。

今年役員改選の年である。そして各地区
の役員(理事など)若干名を増加することに
きまつた。その氏名等は次号で発表。
慶弔連絡先きによるブロックなども明確に
する案が出た。

句会案内ハガキは大会などのほか、出さな
いことになったので、大阪周辺都市の方は雑
誌の本社句会案内をご覧ください。(9月7
日の句会案内はP64をご参照)

出席 形水・栞・太茂津・好郎・生々庵・
薫風・牧人・肖二・柳宏子・小松園・一三夫

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼中島生々庵主幹は健康そのもので、また弓削その他へも足を伸ばされる。

▼10月9日は本社同人總會や路郎賞と川柳塔賞が発表される。また各地での文化祭川柳大会など、爽秋と共に川柳界も活気づく。

▼第5回ふあうすと賞優秀作は「塔仰ぐ柔らかに光る髪―ほか四篇」谷口幹男。第5回紋太賞優秀作は「わたり菓子にあすを問いつめたりしない―ほか四篇」和田恭子。

▼51年度北海道川柳年度賞は「借りてまで指輪哀しい虚栄心―ほか四篇」平賀木章。北海道川柳連盟賞は「野仏のあたりで風がまるくなり―ほか四篇」加納愛山。

▼全国鉄川柳人連盟・20年

史が石原伯峯氏を編さん委員長として刊行されたもの。本社同人の名も多く見られ、なかなかの力作。

▼第20回源氏忌川柳大会(愛媛県)へ美幸、漫柳両氏が関西から参加。暁童、宵明諸氏や山内房子さんらに会われた。なお美幸氏は四位入賞。

▼川柳番傘八月号「岸本水府十三回忌記念特集」として、川柳の第四運動など堂々三〇ページ。なお8月6日の水府忌墓参には本社から橋高薫風氏と高鷲亜鈍氏の代理として香川亜成氏が参列した。

▼藤村涼子さん(米国)から一六〇号記念大会では生々庵先生や薫風さま、一三夫さまほかの方々のお志感激いたしております。

▼富士野鞍馬氏(東京都)が7月10日東京船員保険病院で逝去。享年82歳。(追悼本文誌P.45)氏の告別式は7月17日(日)午後2時から京都市紫野十二坊町の上品蓮台寺で営まれ、多数の川柳人の参列があった。本社からは橋高薫風、藤村ペ女、塩満敏三氏が参列ご冥福を祈った。

▼島田兼孝氏(大洲市)から一県薬剤師会長や獣医師会長ほか役職を退きました。8月21日から川柳大会でこぼれだけで食い兼孝のお

▼全広島平和祭祀記念川柳大会(RCC文化センター)が8月7日開催。本社関係では静水、蘭幸、善居、千翁、英詩、鬼焼、酔々諸氏

▼若本多久志氏(西宮市)は本号の雑詠は休まれたが

▼全広島平和祭祀記念川柳大会(RCC文化センター)が8月7日開催。本社関係では静水、蘭幸、善居、千翁、英詩、鬼焼、酔々諸氏

▼若本多久志氏(西宮市)は本号の雑詠は休まれたが

▼若本多久志氏(西宮市)は本号の雑詠は休まれたが

▼若本多久志氏(西宮市)は本号の雑詠は休まれたが

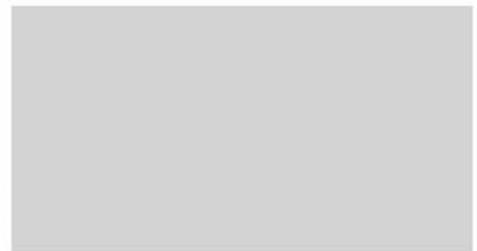
▼若本多久志氏(西宮市)は本号の雑詠は休まれたが

▼若本多久志氏(西宮市)は本号の雑詠は休まれたが

兼第6回北陸小松川柳大会

日時	場所	開場	閉場
昭和52年9月25日(日)	小松市小馬出町	午前10時	午後10時
次第	川柳塔本社同人	開会13時	閉会17時
祝辞	川柳塔本社同人	開会13時	閉会17時
席題	各題共選(二句提出)	開会13時	閉会17時
1 当日発表	富大 富大 富大	富大 富大 富大	富大 富大 富大
2 当日発表	石富 石富 石富	石富 石富 石富	石富 石富 石富
3 当日発表	石富 石富 石富	石富 石富 石富	石富 石富 石富
宿題	各題単選(二句提出)	各題単選(二句提出)	各題単選(二句提出)

▼本田恵二朗氏(倉敷市)から一ライオンズやロータリーに川柳グループが結成され入門講座に引張りだこですと。こういうところから本誌購読者が増加するところがあることだ。



ど、この人も忙しい。
 ▼奥谷弘朗氏（倉敷市）は「打吹川柳」再刊で意欲をもやしておられる。本誌購読者倍加運動に積極的で感謝申しあげる。

▼小西無鬼氏（兵庫県）から8月は南支関東部隊の戦友会ほか、逃げられない会が多く、本社句会へも出席できません。

▼大山と金氏（東京都）今年も大陸川柳同窓会（福島）へ出席します。只今は群馬県四万温泉に来て「二路集」の選をしております。

▼吉岡通児氏（松江市）は全快退院された。
 ▼傍島静馬氏（宝塚市）は神鋼病院に入院されているが、葉、薫風、牧人諸氏の見舞いを受けたものの、どちらが病人か分からぬほど元氣とのこと。

▼西いわを氏（藤井寺市）から一座右の句を載せていただいたのは、再起不能？との考えすぎでしたが、幸い順調です。（実は座右の句は二度目の掲載）

▼不田一三夫氏編集の「漫才」で川柳募集。佳作が「中入」三才が「真打」という、いかにもこの雑誌らしいが、川柳は上達しないとのこと。

こす・魔法。席題二題（兼・席題とも各五句以内）投句は郵券百円同封、締切は当日到着分限り。投句先581八尾市高安町北一の二五。大路美幸宛。

▼堺川柳会は12日午後六時から八木摩太郎宅で開催。兼題「秋風・トレーニング・愛情」。

▼南大阪川柳会は20日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は「道・アイトル・参考・ためらう」。

▼南海川柳会は22日午後六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「穴場・見込み・もらい泣き」。

▼川柳東大阪句会は24日午後六時から大阪府中央公民館二階第二集會室で開催（近鉄永和駅すぐ南、新装成ったお馴染の会場）兼題「無駄・素人・重ねる・ブーム。席題二題当日発表」。

▼菜の花句会は10日（土）夕六時から西郷会館（八尾神社境内）近鉄大阪線八尾下車南歩一分。会費三百円兼題「メルヘン・極楽」の

▽旅 信△

第24回 八尾文化祭市民川柳大会

落合思月句集
発刊記念大会

7654321
 特別課税「ふるさと」
 会費 一〇〇〇円（句集は無料進呈）
 投句先 当日不参加者の投句は辞退します
 連絡先 小松市本町一丁目一〇 吉田秀哉
 主催 八尾市立公民館

とき 昭和五十二年十月十日（祝）正午開場
 ところ 八尾市商工会議所 三階大ホール
 近鉄（大阪線）八尾駅下車南東300m
 八尾市役所前

開会の辞 高杉 鬼遊
 お話「運命について」 志水浩一郎氏
 兼題及び選者（順不同）

鬼「新新聞」 平山 繁夫氏
 新「新新聞」 橋高 薫風氏
 新「新新聞」 室高 千尋氏
 新「新新聞」 深尾 藻介氏
 新「新新聞」 吉則 菜氏
 新「新新聞」 西尾 菜氏
 新「新新聞」 古川 鶴声氏
 新「新新聞」 古川 鶴声氏
 新「新新聞」 古川 鶴声氏

席題 一題（各三句吐）締切午後一時三〇分
 閉会の辞 581（八尾局私書箱第九号）
 投句先 八尾市清水町一丁目一六
 八尾市立公民館内 川柳係
 ※ご出席の方は当日投句受付いたします。
 賞 各題最優秀句に八尾市長賞その他の賞品
 費 五百円（呈・花及び大会句報）
 懇親会 五百円
 主催 八尾市・八尾市教育委員会
 後援 八尾市立公民館
 八尾菜の花句会

本社八月句会

会場 金属会館

八日 午後六時

記録的な暑さにもめげず、六十数氏の元氣なお顔が会場を埋める。そんな中で、大田市の

軒太様氏や京都の規不風氏ほか紹介された

原爆忌33回忌法要や、本誌の「終戦前後」

など、平和の道―世界に響けと、戦争を憎む声があふれる今日の柳話は、当時の第一線で活躍された野村太茂津氏の戦争体験談だ。

スペースがないので全容をお伝えできないが、ノン・フィクションの強さにグングン引きつけられ、聴く人も敗戦将士の苦しみを痛いほど味わったことである。戦争を知らない人も二、三おられたようだが、平和がいかに尊いかをつかまれたことと思う。

外は待望の雨である。これで少しは涼しくなってくれるだろう。

月間賞は本年二回目の中川滋雀氏である。

(受付―塩満敏)

(進行―西田柳宏子・記録―高杉鬼遊)

出席―敏・雅風・水客・紫香・醉升・与史

・軒太様・美幸・漫柳・古方・右近・つき子
 ・蘭・夕花・育園・川狂子・飄太・太茂津・
 寿子・一三夫・庸佑・喜風・誓二・三十四・
 好一・勝美・幸生・天笑・岳人・智子・文秋
 ・維久子・規不風・きみ・勝晴・亜成・栞・
 度・形水・鬼遊・鎮彦・醉々・生々庵・頂留
 子・凡九郎・雀踊子・小松園・みずほ・肖二
 ・綾女・幸太郎・寿美子・定男・幸・柳宏子
 ・一舟・一二三・あいき・弥生・牧人・滋雀
 ・葉子。

席題「西瓜」

津田 与史選

切売りの西瓜で夫婦ことが足り
 空手部の手刀西瓜割ってくれ
 節約は西瓜の皮も漬けて食い
 風鈴の下の裸へ西瓜切る
 子沢山の西瓜の大小見定める
 冷え頃の井戸の西瓜へ不意の客
 課長の頭と思うて叩く西瓜割り
 西瓜割る女の相手をする平和
 無造作に切った西瓜でもめている
 あらねもなく娘西瓜へかぶりつき
 西瓜畑で朽ちてコレラを怒まない
 観客を西瓜と見下している舞台
 こんな時出ッ歯で良かったスイカ喰う

智子 育園 飄太 小松園 牧人 幸太郎 誓二 弥生 つき子 牧人 幸生 漫柳 寿子 綾女 美幸

要らぬとも言えず西瓜持たされる
 ドラキュラーみたいな口で西瓜食べ
 ポンポンと音たててみる西瓜売り
 妻にタネ取らせ西瓜はボヤかれる
 西瓜切る父の罠りは虎視たんだん
 種のない西瓜ズボラな児に育ち
 西瓜のまるさへふと胸いたむ敗戦忌
 河内太鼓のひびきで熟れていく西瓜
 帰郷すれば早速井戸の西瓜揚げ
 ふる里は大和土産の西瓜重くなる
 入れ替り叩かれ西瓜の罪にされ
 西瓜割る母倅せな貌をして
 仕末書のそばで西瓜を食べられる
 自信たっぷり西瓜屋は切って見せ
 西瓜割り見事地面をたたきはる
 ふる里へ西瓜と母に逢いにゆく
 西瓜切る声へ昼寝が起きてくる
 生きてゆく幸で西瓜赤く割れ
 切り西瓜母にもあった依怙いき
 冷やかして西瓜二つも買わされる

つき子 亜成 岳人 一二三 幸 醉々 誓二 雀踊子 太茂津 智子 水客 生々庵 凡九郎 夕花 牧人 太茂津 好一 蘭

昭和52年 国鉄川柳句集 第21集

参加二百二十九人(一人五句)頒価千円・

川柳塔社の同人がズラリならんでいます

発行所 全国鉄川柳人連盟

● 616 奈良県生駒郡三郷町立野二三二 古川 一高

道化師の顔で西瓜が出番待つ
切売りを三時へさます老夫婦
気のおけぬ仲は裸で食う西瓜
叩れた音で西瓜は値ぶみする
真二つ西瓜太郎が生れそう
西瓜ふと欺ます気になる彩を持つ
甘い甘い西瓜の嘘を買わされる
鉢植えの西瓜に賭けている男

席題「朝顔」

小出

智子選

今朝だけを信じ朝顔咲き揃い
朝顔を育てて花が好きになり
朝顔にしゃがんで悟った顔をする
朝顔の千代の詩情を忘れ兼ね
絵日記の朝顔赤くかいてある
朝顔の花のいのちを啜うまい
大輪の朝顔へ老後を賭けて見る
朝顔の生涯を見る夏休み
朝顔の母いの限り咲きつづけ
揺いた憶えないのに朝顔を出し
朝顔の種を欲しがらる花屋の子
朝顔が奇麗に咲いて病癒え
朝顔へ恥ない顔で会えますか
朝顔の蔓に生命の性を見る
朝顔の蕾に早起きせがまれる
朝顔が咲いたらみんな白だった
朝顔に水やる孫も幼稚園
朝顔の鉢が並んだ露路の貌

幸 勝美 滋雀 夕花 鬼遊 凡九郎 滋雀 与史 生々庵 天笑 水客 軒太楼 雀踊子 醉升 維久子 鬼遊 庸佑 岳人 勝晴 凡九郎 凡九郎 あいき 敏 醉升 肖二

朝顔の咲いたを知らぬ夜の蝶
朝顔は知らず隣りを向いて咲き
はかなきをよそに朝顔咲きほこる
児の夢を叶え朝顔一つ咲き
朝顔に一夜の罪を裁かれる
朝顔にゆうべの妬心笑われる
咲き誇る朝顔やがて秋を知る
朝顔の詩情につるべ見つからず
朝顔の午後ははずかに眠るのみ
朝顔が咲いた咲いたと子の日記
朝顔が今朝も咲いてる道を選ぶ
朝顔の市立つ市井にある名残り
朝顔の垣根を越してよこばれ
朝顔の咲くを知らない夜行性
引つ越しへ朝顔惜しい花をつけ
朝顔の前で朝刊ひろい読む
絵日記に朝顔ばかりつづくなり
朝顔の好きな女で裏切れぬ
朝顔の家と近所で言うてくれ
朝顔のようにきれいにしほみます

兼題「氷菓」

河内 天笑選

おさらえ会楽屋で氷菓待つている
五十円氷菓へ走る孫の汗
アイスクリン好きな女でやせている
まだ恋を知らぬ同志の氷菓子
のろけてるうちに氷菓子とはとけ
アイスクャンデー握ったまんま泣きやまず

右近 一舟 維久子 一三三 寿子 つき子 美幸 柳宏子 夕花 庸佑 滋雀 きみ 勝美 形水 太茂津 水客 寿美子 夕花 水客 智子

ピンハネが母さんの分となる氷菓
集会を当てにしている氷菓です
よいとこに來たとキャンデーすすめられ
アイスクャンデー指切をしてお留守番
氷菓子花緒のきつい祭り下駄
キャンデーも母娘でかぶる夏祭
氷菓なめると風鈴が鳴りかける
救急車アイスクャンデー握ったままで積み込まれ
つましくアイスクリームを咽につめ
氷いちご妻のくちびる若がえる
珍客へ自家特製という氷菓
氷菓子終戦の日も暑かった
水銀柱と並ぶ氷菓の売れ具合
旅人の手にアイスクャンデー似つかわし
フラップと言う金時の値が高い
屋下りの平和をくれるシャーベット
氷菓虫歯の機嫌悪くする

つき子 漫柳 敏 勝晴 あいき 雀踊子 喜風 度 小松園 生々庵 夕花 庸佑 みずほ 庸佑 水客 鬼遊 幸 つき子

戸倉普天氏の
句集「普天句集」

序文・戸田古方・送料共千円
30年前の日本人の姿がここにある。
本社でお取次ぎいたします。

水菓子売るおっさんの玉の汗
 一と匙の水菓にスツと引いた汗
 かき氷夫婦童話の中にいる
 猫舌でアイスクリームも苦が手なり
 それぞれに水菓を持って打ちとける
 キャンデーのしずく本屋はひやひやし
 迷い子に水菓もたせるママボリス
 回転木馬水菓は母の手にあずけ
 キャンデーへの頭数増えていた
 肩ぐるま水菓のしずく背を走る
 停電でみんなこわれた水菓子

好一 幸太郎 夕花 生々庵 水客 文秋 登美也 育園 つき子 登美也 天笑

高原を受け皿にして陽が落ちる
 中二階襖に張ってある高原
 止めさす矢を引き絞る高原を逐う
 八つが岳日本一を汽車走り
 熊の噂ひやり高原を降りてから
 名も知らぬ花高原にある眩暈
 ほうれん草育つ高原見直され
 高原の駅が孤独になって秋
 その影の小ささ高原に立った僕
 高原がつづく速度制限など知らず
 高原に来て長篇を書き上げる
 高原の月も病んでる療養所
 老いの視野秋高原に拡げられ
 高原の星空すこし思想めく
 高原は丸太をロマンの家にする
 人の居ない時も高原星は降り
 高原の霧の演技に負けている
 高原の風争いは避けている
 高原の牛は都会の灯をみつめ
 高原の子馬にやがて鞭の音

水客 岳人 小松園 勝美 生々庵 雀踊子 一舟 一二三 凡九郎 小松園 一三夫 あいき 雅風 幸 みずほ 漫柳 小松園 水客 水客 岳人 美幸

兼題「高原」(歌江氏の代選) 大路 美幸選

登美也 優 一栄 柳信 醉々 鬼遊 文秋 雅風 勝美 蘭 鬼遊 夕花 幸生 度

兼題「対談」 竹中 肖二選

登美也 一栄 柳信 飄太 雀踊子

奇術より助手の
 美貌に見惚れる
 (本蔭棒)

関西奇術教室

対談をふつつり切ったコマーションシャル
 対談も放談になる時間切れ
 対談へ損な顔だちだと思ふ
 対談の口を開けば民主主義
 対談の笑顔にかくす探りあい
 対談へ伴大人に成つて来た
 対談の奥に尾を引く金と欲
 痛いところ突つかれ対談往き戻り
 対談の時だけ政治家たのもし
 対談を上手に煽る週刊誌
 対談に解けた労資の掌の温み
 金一封出る対談でリハーサル
 対談へ吐芸という粋がある
 さわやかな別れの対談あたたかい
 棘含む対談飲物出しそびれ
 対談へ矢鱈数字を並びたて
 対談で互いに腹をさぐり合い
 対談に希望をつなぐ漁民団

寿美子 醉々 幸生 醉々 幸 幸 蘭 維久子 太茂津 与史 一三夫 喜風 一舟 凡太郎 牧人 右近 栗 庸佑 幸太郎

対談の紅い炎気が責めてくる
対談で言わずもがなのことを言い
方言の対談望郷つものらせる
対談の顔ぶれブン屋の眼が光る
通訳の要る対談のもどかしさ
対談のムードがお金で冷えてくる
責任のない対談で面白し
対談の才女中性かも知れず
放言が過ぎて対談カットされ
核心にふれて対談もつれだし
対談へ女の親が承知せず
対談へ配慮の宿がお気に召す
方言が出て対談がはずみ出し
対談が終ると女にもどる女史
対談へ土地の名菓が盛つてある

つき子
形水
綾女
頂留子
軒太楼
滋雀
柳宏子
栞
柳宏子
好一
小松園
育園
水客
夕花
肖二

兼題「走馬灯」(野郎氏の代選)
走馬灯仏間の霊を慰める
まわり灯籠浴衣の子等にかこまれる
走馬灯遠いえにしの人も来る
走馬灯売つてる夏の百貨店
敗戦の闇浮きたたせ走馬灯
走馬灯あの日もこんな雨の宿
遺影との対話が続く走馬灯
走馬灯灯火消ゆれば一切空
走馬灯の絵は落ちこぼれせずにまい
走馬灯思慕のせ切れぬちぎれ雲
走馬灯我が人生を追いかける

登美也
どんたく
一栄
敏
太茂津
育園
軒太楼
醉々
一舟
寿子
勝美

正本水客選

走馬灯追う日の女飾らない
走馬灯影に軍歌が未だ残り
走馬灯へ過去の絵をかく凡夫婦
煙草の灰ポロリと落ちる走馬灯
走馬灯わたしに哀しい灯を送り
走馬灯今夜も風の言いなりに
走馬灯少しセンチにして消える
亡き人の処で止る走馬灯
どの絵にも亡き子が出てる走馬灯
嘘のない夫婦に明日の走馬灯
旧友に逢えば動き出す走馬灯
忘れろ忘れろと走馬灯喋り
だんだんに灯のいろとなる走馬灯
走馬灯母が喋ればよく回り
走馬灯虫も一匹来て回わり
走馬灯田舎のバスが通ります
明日が写る走馬灯なら見たくなる
走馬灯ふらい記憶を仕舞いこむ

夕花
漫柳
雀踊子
定男
一二三
頂留子
度
漫柳
形水
美幸
綾女
つき子
幸太郎
岳人
紫香
生々庵
水客
夕花。

▼前号追加「雲の峰予約しておく席がない」
(河井庸佑・整理)

残暑お見舞い申し上げます
皆様のご健康を祈りあげます。
篠山
小西無鬼

昭和52年度 大阪文化祭

第29回 川柳大会

日時 10月10日(月) 10時開場
会場 中央公会堂(3階小集会室) 地下鉄「淀屋橋」中之島公園内
講演 「難波の文化と大阪城」
大阪市立美術館学芸課長

兼題 「子煩悩」
「花」
「凡人」
「高原」
「嘘」
「近頃のニュースから」

秋山 進午氏
久保田以兆選
谷口 光穂選
菊沢小松園選
堀江としを選
岩井 三窓選

席題 当日4題・各題2句・締切1時
・出句は出席者に限りません。
(兼・席題共、当日会場で受付)

賞 兼・席題の秀句に府知事・大阪市長・府市教委長から「川柳賞」
「選者から「選者賞」を贈呈。

句集 入選句集代三百円、当日申込受付

主催・大阪府・大阪市・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会
協力・各柳社―協賛・日川協

京都塔の会

松川

杜的報

花まつり甘茶で釈迦は行水

京童

螺子釘の頭くるくる梅雨晴れ間

よししろ

夏の夜の笑いテントを抜けてくる

潮花

義理だけを郵便ハガキつないでる

喜醉

まんじゆしやげ頭にきして村芝居

隆子

夕立のタダ中バスをほり出され

求芽

敵門の自然はかくも岩を抜き

佳加志

石頭酔うとだんだん筋通り

竹生

沸き水はリズム崩さぬ音で落ち

紫香

落書きの相手と違う相合傘

与呂志

頭の毛切つてイメージ変える初夏

新一助

蝶入りへ二三歩梅雨の傘歩く

美穂

落書きに感心しながら出たトイレ

形水報

頭ごなしに叱つてくれる父が欲し

江留美

二代目に委せて菊に凝りはじめ

飛鳥

落書きをしてみたくなる白い壁

野成

部分品一つ足らんかわが頭

野生

お目付けという二代目にヒモがつき

誠史

鉛筆を耳にはさんでさあやるぞ

みどり

遠足にかわいい頭数えられ

公度

二代目さんと呼ばれた伝統にしばらく

水客

鉛筆の長さも揃つた一年生

前田

頭からレールの夢は遠ざかる

恵美子

断腸の別れへ手を振らず

杜的

健康を取り戻したら走りだす

西浦

手みやげに鈴虫さげて友見舞う

一恵

盲腸を取つて目方が増え始め

客遊子

健康に恵まれどこかが狂つてる

聖地

言い訳のみやげ捜している深夜

亜也子

袴のように浴衣に糊がきき

三求

ただ一人父黙々と歩いている

洋々

頭かくポーズが今も続いている

博幸

川柳大阪

児島

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日のブランを父は知らぬ振り

美幸

ヨレヨレのジパン裾で道を掃き

漁人

父の日の父はケーキにてれている

幸太郎

父の日の父はケーキにてれている

幸太郎

同姓同名郵便屋まごつかせ

笑風

父の顔知らず育つて父となり

洋々

父の日の父はケーキにてれている

洋々

川の水動かずネオンの顔となる

三十四

父の日の父はケーキにてれている

幸太郎

父の日の父はケーキにてれている

幸太郎

開通に一番乗りのベルを待つ

真実

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

意見すりやふくれるだけでうなずかず

秀峰

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

偶然も己れの手柄にしてしまい

清風

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

生活の一つ二泊の旅に出る

洛醉

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

オーブンカー優勝カップが主人公

敏

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

片想い花一もんめは彼の妻

秀子

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

橋向う幸せそうな灯が見える

道子

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

宣伝が効く薬桜に人絶えず

徳松

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

子が帰る頃よと手の甲つねられる

本蔭棒

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

新婚の旅に花束邪魔になり

天歩

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

別れた心にうつろな発車ベル

閑士

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

大そうなツゲ日曜大工に刺さり

重人

父の顔知らず育つて父となり

孝夫

父の日の父はケーキにてれている

孝夫

佳句地10選 (前月号から)

村田瓢太選

仏心が芽生え心も身も丸く
やつと寝た子を一匹の蚊が起し
ゴネ得のうしろに軍師ネジを巻き
正論を吐いてひよことあしらわれ
面つけて踊りの渦でアホになり
石庭で女誤解の謎を解く
量の上で死にたい欲を持ち始め
雑草の執念アスファルトを破る
狂いたき過去もあつたと名妓老ゆ
子をひとり川で亡くした石仏

右近
華子
秀峰
ゆきを
京子
鎮彦
胡相
千樹
淳子
松風

頭撫でられてみなし児きまろきまろし
人生に棄権する日などはない
頭から怒鳴り自分に負けている
両肩に支えきれずにいる頭
頼まれたおみやげを買う途中下車
澄み切った頭で棄権と決めている
頭脳明晰しあわせのない施設の子
この頃の父は頭も疑われ

城北川柳会

川口

泳げない水着は派手に浜辺跳ね
古泳法見せてやるぞと祖父りきみ
海水浴陽やけを比べつつ帰る
火中の栗拾った様な過去もあり
戦災を経た拾い癖なおらない
骨拾つてやると仲間励まされ
届ける気あつても拾うてあたり見る
東亜戦落穂拾いのあの記憶
拾った恋でも実がなり花も咲く
同郷を拾い出してるカンパ帳
海水浴ビキニ姿は濡れたい
大選手の未来を思い球拾う
うっかりと拾つて食べたが命取り
落し物拾うて善を積み重ね
自転車を下りてつまらぬ物拾う

どんぐり川柳会

谷垣

右近 凡九郎 巫女 鉦 小松園 三千子 蕪風 弘生報 三十四 道子 右近 弘生 満津子 千子 恒治 弘 惠美子 喜代子 畑 斎 ますえ 秀村 喜洗 史好報 美幸 弥生 好郎 サヨ 小松園

号令を聞いた哀しい父の耳
胸の痛みひとに知られず秘めており
心のかげも洗つて再出発に秘めており
カビがもつて再出発に秘めており
伝説を守ると自信かびてくる
都合よく妻の掌で眠る
修身を持ち出す脳がカビてるぞ

川柳塔まつえ

祥月報

水筒も濁酒運んだ過去を持ち
抽斗の遺品にすまぬ化粧する
水筒は父の自慢の戦斗記
初めてと言うこの人奥がある
抽斗を腹立ちまされみんな抜き
原色の好きな娘抽斗に秘密持ち
抽斗に軍服姿の父をみる
昼売れぬ品を夜店の目玉にし
蔵前へ行く水筒に酒をつめ
夜店の灯抜けて大橋風があり
残業の帰り夜店へ廻り道
初めての今夜を二人だけで酔い
初めての子へ両親の愛が過ぎ
水筒が戦跡語るたまの傷

川柳わかやま

津田 与史報

鬼遊 鎮彦 勝美 真砂 萬里 醉々 史好 みのる 虎秋 早苗 雅逸 鶴丸 孤呂二 登美也 巡歩 快哉 舞吉 叮紅 兒男 祥月

愛妻の色に染つてゆく料理
染めかえて母のかたみの手織り布
還暦の心若やぐ爪染めて
遠火が土地の訛りに早や染り
遠火花金魚すくいの手を染める
ぬれぎぬの暗れぬ鏡に帯を締め
片隅に埋もれて朽ちて悔はない
片隅の男突飛な意見出し
正論がまた片隅のゴミとなり
片隅の意見が痛いところを衝き
小さな夢抱いて長屋の隅で生く
贅沢な世の片隅に落ちこぼれ
失せてゆく肌へ抵抗の炎を燃やす
肌荒れ鏡の女に聞いている

川柳後楽(岡山市)

井上柳五郎報

人相を知つたかセバード吠えもせず
人相に向いた話題で酌をされ
整形をして人相が悪うなり
客引きの勘人相にだまされず
割勘の三次会からつけになり
伝票に割勘でしようと手を重ね
飲み食えとよい顔見せて割勘定
割勘の鴨ござんなれと網を張り
割勘の要員下戸にある人気
不景気につける薬借りられず
気休めのくすりを貰う三日分
くすり箱何処にやつたか日々平和
毒舌が良薬になつた友の言
平和さえ闘いとれと言う選挙
割勘の友を目配せして誘い

三千代 一風 紀川 大彦 天彦 光代 恒治 武雄 柳宏子 善彦 壽美敷 善彦 博友 胡風 柳五郎 戴嘉 梁太 元一 定平 佐加恵 ひろし 昌吾 照路 廉 久米雄

倉吉打吹川柳會

奥谷 弘朗報

七十を過ぎて妹と二人きり
 それぞれに運命に生きる三姉妹
 妹も秘密の箱を持つている
 妹と話すときだけ国なまり
 妹も亡母の姿になつて来る
 母知らぬ妹母にいきよつし
 妹の見合姉がアドバイス
 妹の方が勝気でさらわれる
 妹を嫁かせ明るい姉である
 したがわぬ妹たててお人好し
 兄の分あわせ妹のよくしゃべり
 農繁期妹けなげな母替り
 順番を気にして妹も歳をとり
 まわり道しただけ努力認められ
 廻り道だつたがやつと結ばれる
 煩悩はよくよ無駄を考える
 無駄ばかりする人生とも思う
 無駄づかいするなと父はバーで飲み
 西宮北口句會 小浜 牧人報

夕路 律子 石花菜 たつ枝 碧水 千恵子 観葉 弘朗 露杖 すゑの みなと 満春 勇峰 菊野 寿雄 善句 小生 喜世 千世子 めぐる 豊子 摩耶子 無聖 笑女 総浦 清川

急所には触れない友の思いやり
 宿命とは何かとふつと考える
 添え書の一行胸に灯をともし
 お下げ髪星のしずくを掌にためる
 温泉で昨日の敵の背を流す
 髪型を変えて明日へ脱皮する
 髪小さく束ね静かに喪の女
 湿ましい腕よと思う人ごろし
 大田川柳會 藤田 軒太樓報

天災は無防の隙を衝いてくる
 防ぎよつない雨漏りにふて寝する
 着物買い嫁の鉾先防ぎ止め
 罪の子を親防波堤となりかばう
 地すべりを防ぐ愚案の崖の人
 防犯に一役かつた五才の目
 老婆敬遠される種となり
 ライバルに敬遠と云う垣が出来
 敬遠はしても心に宿る人
 上座一つ空けて敬遠されており
 友情を信じた手から砂こぼれ
 羅針盤あつても心まだ迷い
 あれこれと迷つた末の神信心
 川柳ささやま 河原 みのる報

手作りを娘鉢ごと持ち帰り
 不貞の鉢二本目のさつき抱く
 摺り鉢の底はいつまで母のもの
 分解に親子揃つて機械好き
 かえる鳴く夜は機械化の里でなし
 定年という歯車の使い捨て
 機械化で哀しく朽ちる作業唄

紅 正祐 喜久甫 婦美子 政浦 泉女 牧人 伊升 春 春 春 嘉水 秀子 義雄 軒太樓 立雲 雷音坊 ゆう子 河南 虎秋 九二老 孝太郎 久子 孝 幸 禧 千代子 喜美代 みのる 百合子

第二十回近県並合同句集

〃竹の里〃発刊記念大会
 日時 昭和五十二年九月四日(日)午前
 九時開場

会場 竹原市上新開スポーツセンター
 竹原駅より北へ一〇〇〇米
 大駐車場あり雲陽バス停留所

兼題 声、味、絵、宿、鳴、旗、顔、
 笛、灯、以上九題 各2句吐

特別課題 恩 山内 静水選 1句吐
 出題締切 当日席題なし 十一時三十分
 会費 千円(手作りにぎり。発表誌)

合同句集竹の里等)
 進行予定 十二時三十分大会宣言。十六
 時閉会

兼題のみを、八月二十五日までに
 五百円(定額小為替。又は五十円
 切手十枚同封の上

〒115 竹原市竹原町田中 電話(〇
 八四六二)二一四五五四 山内静水
 あてに。尚、句集〃竹の里〃ご希
 望の方は別に送料共に千円を同封
 下さい)

表彰 第二十回連続大会出席者(受彰者五
 名予定)

最高齢者賞 出席者中、男、女、各一名
 賞 市長杯ほか二十位までトロフィー、楯

学生賞 一位トロフィー、以下粗竹
 投句賞 三位まで粗品と句集 竹の里
 合同句集 〃竹の里〃はB6版上製本三
 二〇頁箱入、会員七五名参加

主催 たけはら川柳會
 後援 竹原市教育委員会・竹原商工会
 議所・毎日新聞社

お湿りで瑞穂の国に育つ稲

おしぼりにやれと悪友提げて来る

爆弾を仕掛けられて待ち

花時計横目に女濡れて待ち

真夜中の時計大威張りで鳴り

コチコチと寿命縮める音がする

川柳東大阪

ひとりっ娘とられて何が祝い酒

惜しい娘を嫁にとられて祝い酒

ライバルの栄転祝うにがい酒

二級でも胸に泌みます祝い酒

喜寿米寿白寿と続く祝い酒

祝い酒派手にこぼして目出度がり

ゆずり合う嫁と姑の目が笑う

子にゆずる富も名もなき凡夫婦

身はゆずつても心までゆずらない

ゆずる気がないのに一寸気をもたせ

ゆずられた席のぬくみへ小さく座す

白柳式リードがビタリ板につき

オマハンが大將リードしなはれや

リードする父のタクトが錆びてくる

値上りとストにとまどう新学期

デパートの一足早い新学期

再婚にさえも年頃ありました

家柄を鼻に年頃嫁き遅れ

竹中

あいき

文秋

肖二

美子

右近

三十四

綾女

誓二

千代子

雀踊子

一栄

恒明

好一

柳信

雅風

凡九郎

喜風

鎮彦

宗珠

近松

村雨

越山

文住

古平

老萩

肖二報

あいき

文秋

肖二

美子

右近

三十四

綾女

誓二

千代子

雀踊子

一栄

恒明

好一

柳信

雅風

凡九郎

喜風

有名になつて少うし味が落ち

有名になつて自由が失なわれ

バーの壁有名人の色紙かけ

有名となり方言の見直され

テレビではその名も売れた全国区

ポスターの本人見ない全国区

何処で何していた人か全国区

オーバーな自己紹介に座が和み

紹介をされた宿屋で気がつかれ

石灰を焼く煙梅雨の中で遣い

看板がどう変ろうと替屋町

看板の要らぬ屋台の混んでいる

漢菓の看板に読めぬ字が一つ

矢印の看板へ遠い山の宿

磯釣りの一服して五月の飛行雲

失業の初日は死んだように寝る

触れ合つた指に五月の風の色

悴せを知る読経の鐘の中

お銚子を振つて女房に叱られる

南海電鉄川柳部(大阪市)辻

立入禁止親類妙な顔で立ち

立入禁止血で血を洗う果てのはて

立入禁止幼児は字が読めません

春の陽が立入禁止守らせず

事件記者立入禁止へ活気つき

若子

ふじ子

マコ

美江

紀耕

芽十

麗子

海州

ヒサ

星雨

秋翠

豊榮

柳翠

紅雨

紅笑

美和子

窓花

松風

圭水報

摩天郎

小松園

圭水

柳信

宏子

川狂子

駒つなぎ句会

世話焼を新婚夫婦うるさがり

逆ろうて見ても動じぬ世話係

心得たムード女を気楽にし

見送つた後は気楽な未亡人

先生が気楽過ぎるママ不満

徹マンに気楽な人やなと思

気楽さも過ぎれば愚痴の種となり

気楽には話していても芯がある

平でよし春信じてる父気楽

三億円潜つたままであたためる

海女潜ぐる故郷は青い空と海

法律の裏を潜つて太く生き

法潜る儲けは地下にねむらせる

潜る海女夫に命預け置く

女湯へ潜つて来た子も一人前

カンニングにらむまぶしい瞳を潜ぐり

荒波を潜つてからの乳ばなれ

潜つても潜ぐらなくても雑魚である

潜ぐつてるとこは泡がらすぐ判り

和歌山七面句会

バランスの揺れを劣わる夫婦ごま

ビール一本私は小言多過る

拾う勇氣とても重たい一円貨

団地妻私私が歩いてる

岸南柳報

綾不風

規不風

祥惠

恭太

小路

勝美

はやを

美代

潔

千代三

肖二

宏信

善信

茂子

儀一

雅風

柳信

恒明

小松園

三幸報

寿子

ちや

太茂津

凡夫

幸

光治

富子

秀市

バランスはおかまいなしのおしやれぶり
 勇氣出せと祖母の鏡のなつかしく
 満員の電車尻からの勇氣
 ノーと言う勇氣あるとき出ていたら
 子が一人増えてバランス又乱れ
 バランスシート老眼鏡を二つかけ
 感動も失愛も私のものでした
 向き合せて一人一人を感じる日
 バランスの上手な酒の千鳥足
 ハワイ川柳ウイロー社 林 蒼蛇樓報
 丸々と孫の手ぬくし七五三
 丸い月二つの影を一つにし
 日の丸を掲げた漁船の幸祈る
 酔つて来て丸い踊の輪をくずし
 恥かしうれし丸髷の夜を思い出し
 日の丸を立てて寿ぐ民の幸
 人格がツラブル丸く揉み直おし
 ころころと丸み豊かなお人柄
 丸禿になり人生に箔がつき
 口下手が話上手に丸められ
 満月に一杯いける友が寄り
 世渡りは四角ばらずに丸やかに
 姑嫁丸く仲よく家榮え
 丸つきり思い出せない人に逢い
 丸出しのお国訛りでおばあ様
 夢托す我が子二人の丸いほほ
 甘い口乗つて丸窓罪重ね
 人格の丸さで人の長に立つ
 日の丸を他国で見ればなつかしく
 背が丸くなるまで妻は家守り

昌三郎 勇次 清二 武雄 宏 淳子 和美 三幸 秀山 雪女 公女 三石 暁舟 草海 風影 峰円 拜山 万里歩 椰子郎 小雪 一つ葉 カロ女 紅溪 蒼蛇楼 辰朗 梨花 黄塵 蒼生

紅川柳倶楽部 (唐津市) 新潟回天子報
 防災の頼みの綱の自衛隊
 甚平を裏返しに着て二日酔
 故里をダムに沈めた移住村
 一葉のだれにも内緒写真抱く
 立会演説味方はかりが手を叩き
 あの世へもうかとはげゆね葬儀料
 最低の防災愈る悪会社
 集団をチ切つて乗せる渡し舟
 おしやべりな女味方になぞしない
 意味在り気つばめ飛び交う目に青田
 看護婦のストも一つの裏の顔
 紫陽花が女のすべとも云えず
 アツと言ういとまもなく土砂が落ち
 まるべに川柳会 宮本 茂児報
 千円も線香花火となる夜店
 骨折の脚を吊り上げ梅雨に入る
 梅雨も良し木々の緑は更に牙え
 宮仕え雨でもゴルフにかり出され
 よい爺ちゃんにならうと思えば金が要り
 病床で妻が指図の台所
 台所からナツメロで朝が明け
 親友は勝手知つたる台所
 台所で女はドレス買うと決め
 早かつたのネとテレビから台所へ
 肝心の所で度胸縮んでる
 相場師の度胸は裸になつて
 そこまでは考えなかつたクソ度胸
 遅刻して来て会議かきまわし
 五木 照沖 広坊 岩実 桑原 畑中 一竿 愛郷 朴竜 勝一 虹汀 回天子 和子 星斗 茂児 一弘 諷太 一於 満津子 武水 立児 幸子 道子 武水 好郎

川柳の小径・公園 (第一部) 完成記念
 第29回 西日本 柳大会
 と き 昭和52年9月11日午前8時開場
 と ころ 岡山県久米郡久米南町下弓削
 久米南町中央公民館
 兼 題 「建つ」「公園」「石」「歩く」
 「建つ」「輪」
 選 者 (敬称略)
 中島生々庵 (大阪)
 三条東洋樹 (神戸)
 大森風来子 (岡山)
 水粉 千翁 (倉敷)
 藤川 良子 (倉敷)
 有元祝郎 (久米南)
 席 題 2題当日発表 (11時しめ切り)
 各題2句以内 タテ22センチ、
 ヨコ4センチの句箋に一句ずつ
 明記、裏面に雅号を書き9月5
 日までに弓削川柳社宛。出席者
 は当日10時30分まで受付。
 特別課題 1題当日発表 (出席者のみ)
 ※特別課題第一席の作者には、
 川柳の小径、または公園に自
 然石の句碑 (約8万円) を一
 基建立。(既建立者は辞退し
 ていただきます。)
 会 費 出席 一、〇〇〇円 (発表誌、
 記念品、昼食呈)
 呈 賞 投稿 五〇〇円 (発表誌呈)
 岡山県知事賞ほか9賞を総合成
 績で
 主 権 弓削川柳社
 後援 岡山県・同教委・久米南町
 同教委ほか各種団体

本社川柳忌句会

日時 九月七日(水)午後六時
会場 金属会館

南区鯉谷東之町10番地
電話 271・3935番

柳話 西尾 栗

(今月の出題・見島与呂志)

兼題 「末席」 神谷凡九郎 選

「サラ金」 阿部柳太 選

「誇大」 本多柳志 選

「隙き」 大坂形水 選

各題三句以内厳守

席題 二題 当日発表

会費 三百円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷中之町20

川柳塔社

前号の「濼」は「隙」が正しい。

本社句会のハガキについて

—常任理事会の申し合わせにより今後は特殊な句会でない限り句会の案内ハガキは出さないことになりました。
—句会のご案内は、毎号本誌の末尾に載せますので、ご注意ください。

川柳塔社句会部

・募 集・

十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「秋晴れ」 岩井 本蔭棒 選
「千歳館」 舟木与根一 選
「勤労感謝」 吉原 紅月 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「キリスト」 三宅 不朽 選
「ゆず湯」 村上 旭童 選
「社会鍋」 小谷 仙山 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

一人の遅稿 大ぜい困る

定価 四百円 (送料29円)
半年分 二千五百円 (送料共)
一年分 四千八百円 (送料共)
昭和五十二年八月二十五日印刷
昭和五十二年九月一日発行

大阪市南区鯉谷中之町二〇番通

編集兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 藤原 童心社

郵便番号 542

大阪市南区鯉谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一三九八五番

振替口座 大阪・三三三六八番

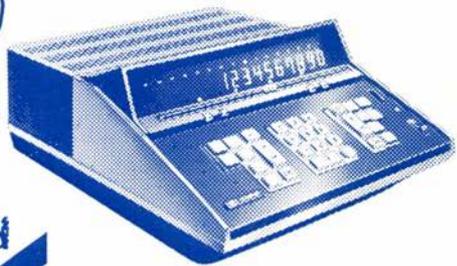
昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和五十二年八月二十五日 印刷
 昭和五十二年九月一日 発行(毎月一日発行)
 創刊大正十三年 通巻六〇四号

川柳塔

九月号



タッチでえらべば
 やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機
サコム
 SACOM

見やすい設計 ICG-162型 280,000円
 平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
 16ケタ2メモリー高級品
SANYO 三洋電機株式会社

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

- | | | | |
|---------------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------|
| 白浜温泉—忘れえぬ
政府登録国際観光ホテル | はまゆうの宿
ホテルパシフィック | 徳島・鳴門—うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 | 鳴門 |
| 政府登録国際観光旅館 | 朝日 | 政府登録国際観光旅館 | 鳴門公園ホテル |
| 勝浦温泉—海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 | 中の島 | 紀北・橋本—ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 | 紀の川苑 |
| 湯峰温泉—山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 | 湯の峯荘 | 大阪・泉南淡輪—魚つりに
観光旅館 | 淡の輪苑 |
| 和歌山・新和歌浦—海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 | 萬波 | 大阪・なんば—清楚で近代的なホテル | ホテル南海 |

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
 サービスチェーン大阪案内所
 ☎06-631-0222



定価 四百円 (送料・二千九円)